



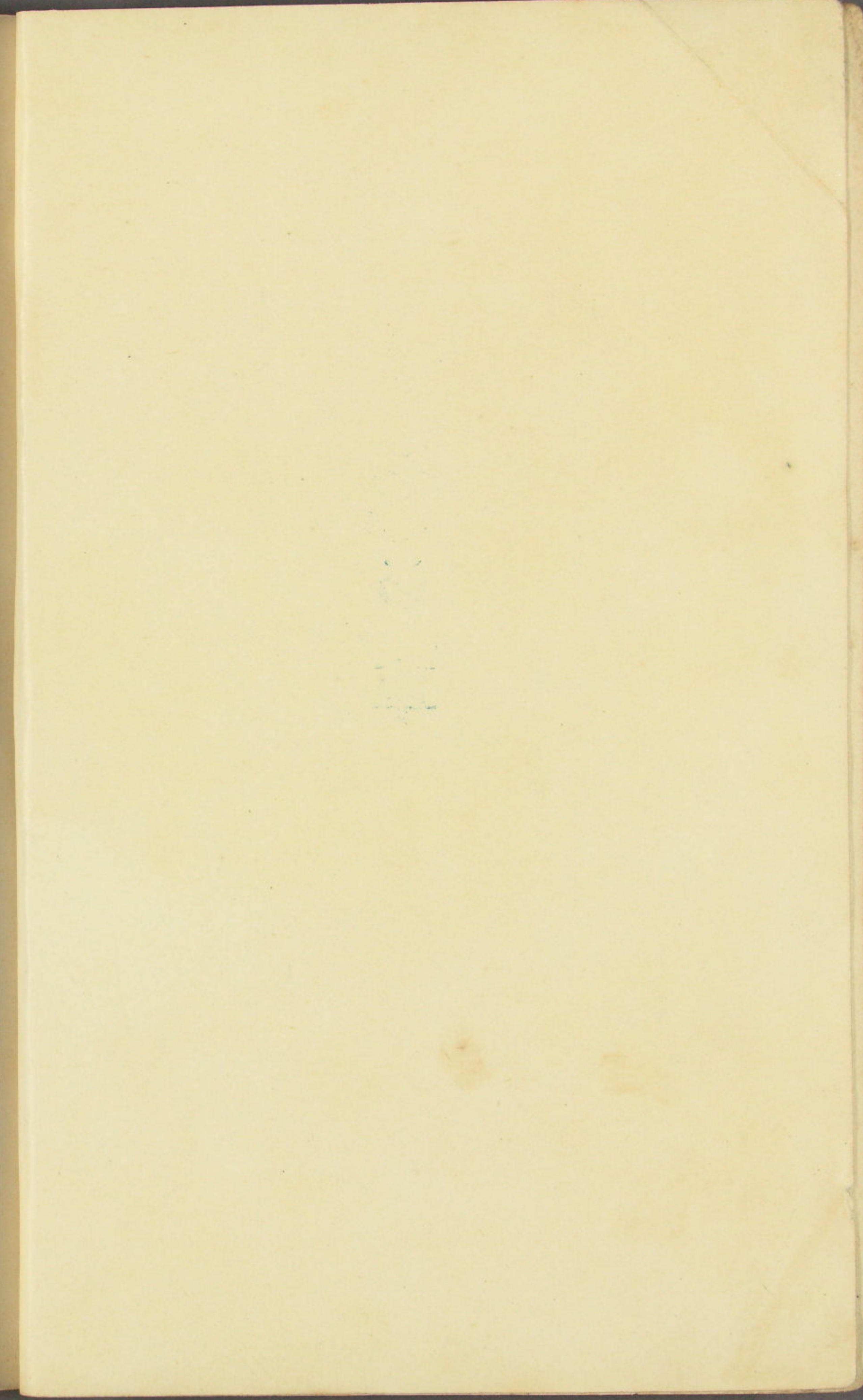
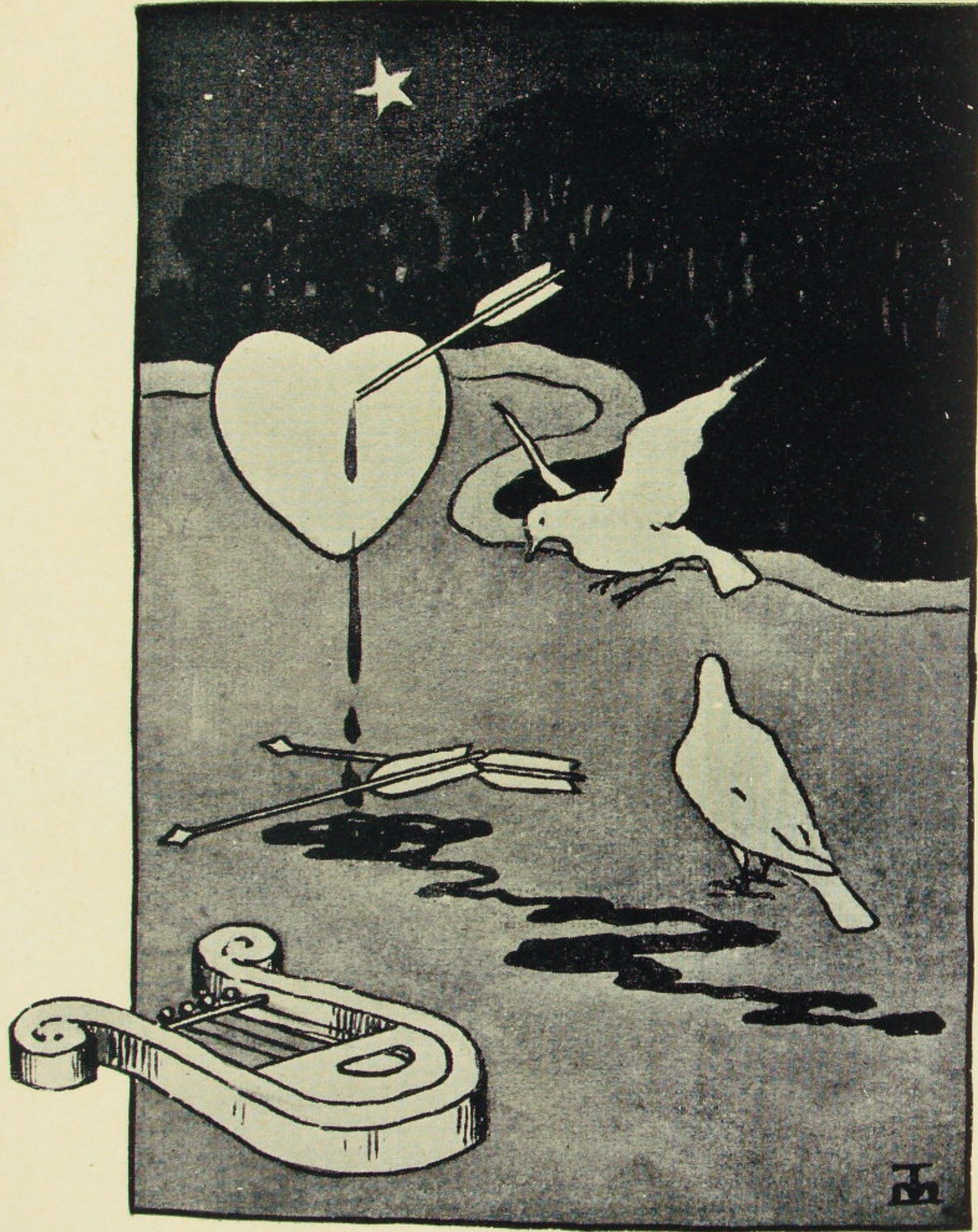
通
配天著







わ
の
草



我が志、はじめ、天下の經綸にありしを、ひとたび、人生の煩悶に觸れてより、我が胸の響きは、潮の如く、盡きず、とこしへに止むまじ。我は今よりこの響きを、自然に合はし、人生に調べて、一の譜を奏でんと欲するなり。こゝに、若草と題したる中に集めたるものは、我がはじめて奏で出だしたる譜なり。

日露戦争媾和になりし翌年
一月梅まだ寒き日しるす

わか草

目次

小鳥……………一
 笛を追ふ……………七
 玉樓……………九
 梭の音……………十一
 行く春……………十五
 夢の旅人……………十六
 待つ思……………十九

挿畫

高村眞夫筆

表紙圖案

ゆめのたびと

なのはな

なつのゆふぐれ

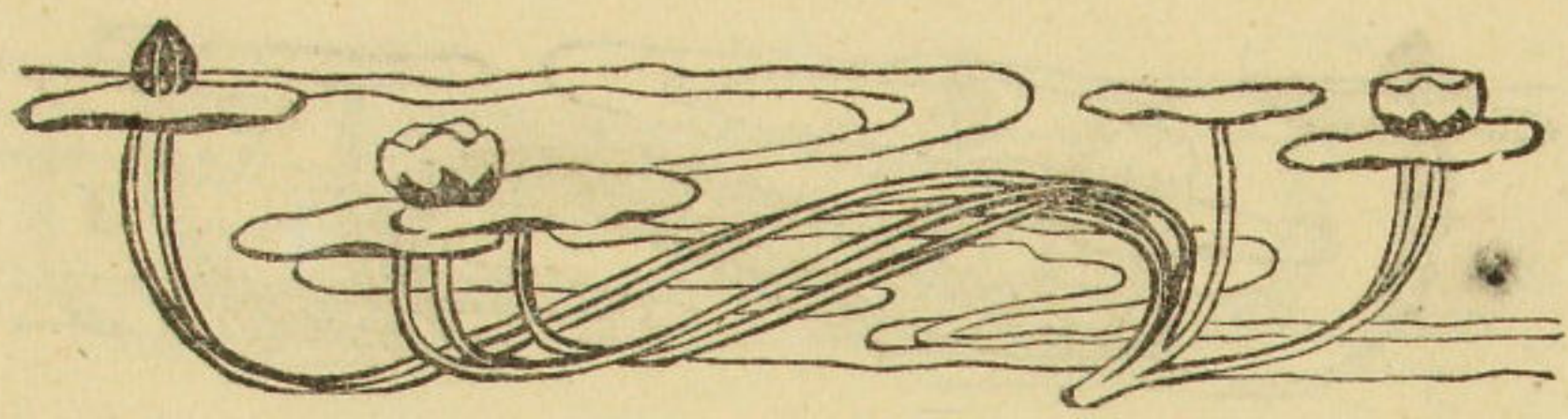
残春	二十一
誰か奪へる	二十三
梨下の女	二十六
うるはしき秘密	二十七
菜の花	二十九
舞姫	三十一
柴垣	三十二
路傍の花	三十五
夏の夕暮	三十八
野中の流	三十九

二

沙漠の旅	四十一
みさを	四十四
草も木も	四十五
川の流	四十八
孤つ屋	五十一
行く雲	五十五
破窓の秋	五十八
月下の蟲	五十九
村の橋	六十一
清き心	六十三

三

水かきみ	六十六
門の柳	六十九
闇	七十一
月もてたとふれば	七十四
驛の桶屋	七十七
二つ道	八十四
うぐひす	八十五
濁り江	八十七
小さむくろ	九十一
闇の聲	九十九

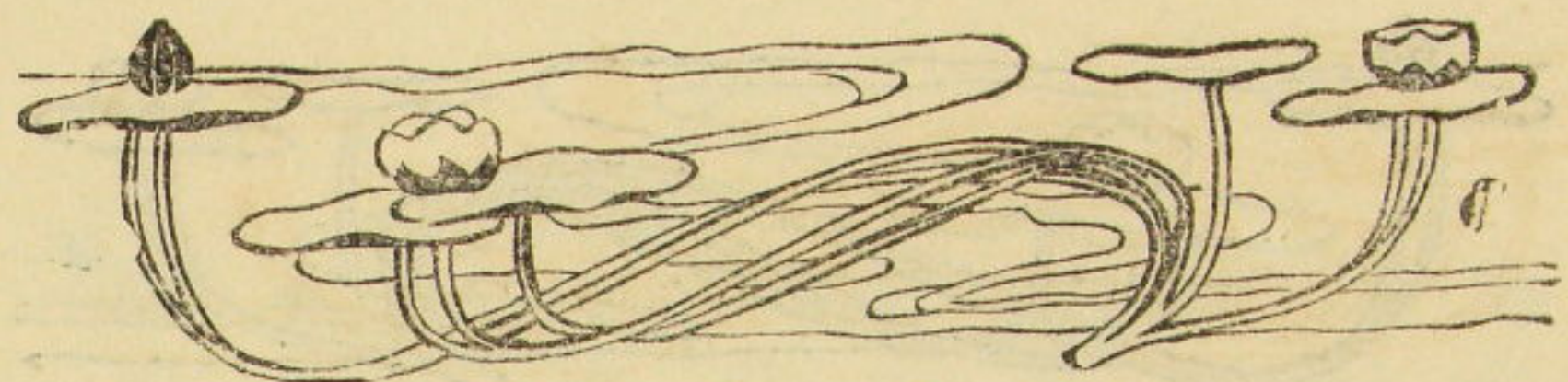


わ
あ
草

樋口配天著

小
鳥

青葉あおは 繁しげれる 木この下もとに
 遠とほき山やま邊べを 眺ながむれば
 小鳥こどりは 梢こずえの 葉はがくれに
 聲こゑも優やさしう 歌うたひけり



天地の中なの たゞひとつ
色香いろか 妙たなる 花園はなぞのに
いでぐ 行ゆかん 花園はなぞのに
軽かるけき羽はを 翻ひるがへし

二

小鳥こどりの歌うたの なつかしさ
我われも行ゆかんと 思おもひ立ち
梢こずえの小鳥こどりに うち向むかひ
そこなの小鳥こどりよ やよ 小鳥こどり

二

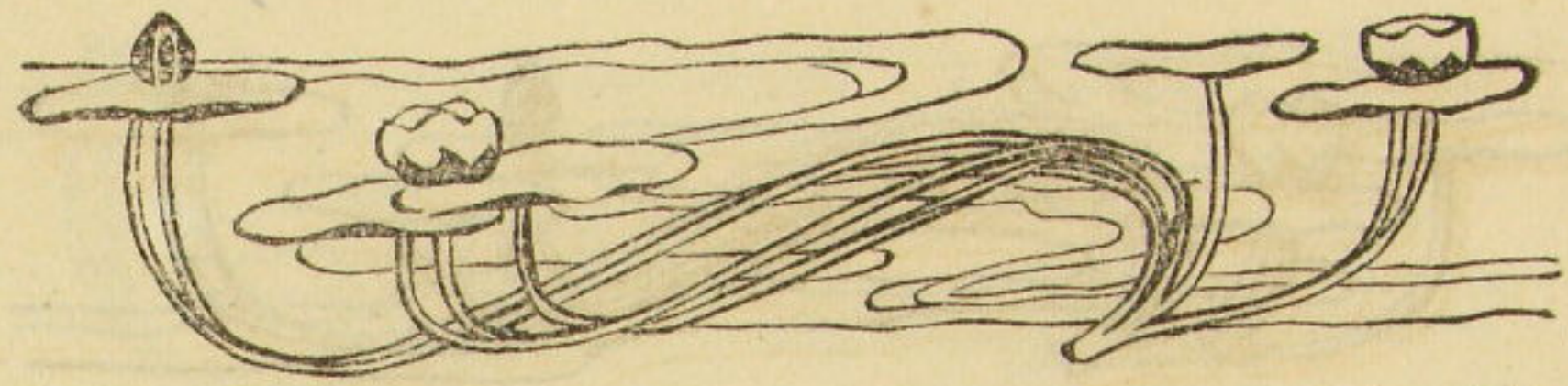


天地てんちの中なかの たゞひとつ
色香いろか 妙たなる 花園はなぞのに
いでぐ 行ゆかん 花園はなぞのに
我われをも伴ともなひ 連つれよかし

三

三

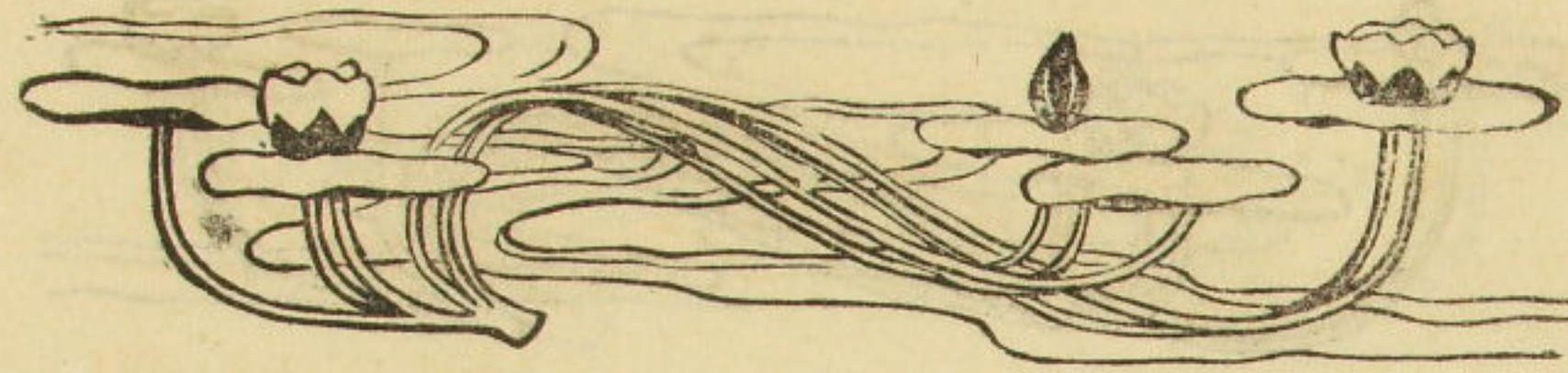
小鳥こどりは たゞちに うべなひて
青葉あをばの梢こずえを 飛とびくだり
伴ともなひ行ゆかん 花園はなぞのに
されど 汝なんぢに 誓ちかひあり



我が言ふことを 守られよ
 汝は 固く 眼を閉ぢて
 此處 花園と 呼ぶまでは
 ゆめく 眼をば 開くなよ

四

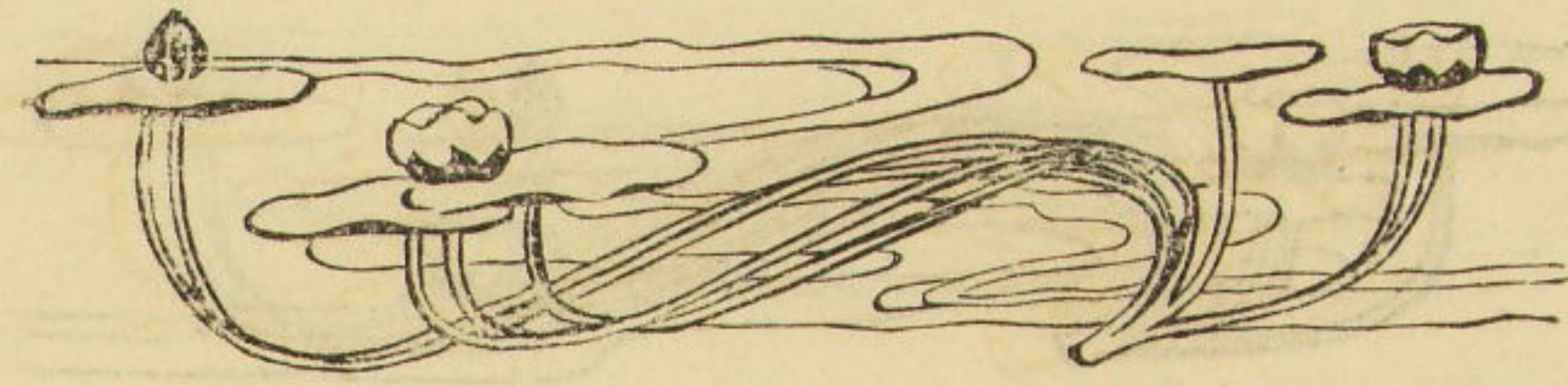
小鳥のことばに 従ひて
 我は 固くも 眼を閉ぢつ
 その やはらかき 羽の上に
 乗れば 小鳥は 飛び出でぬ



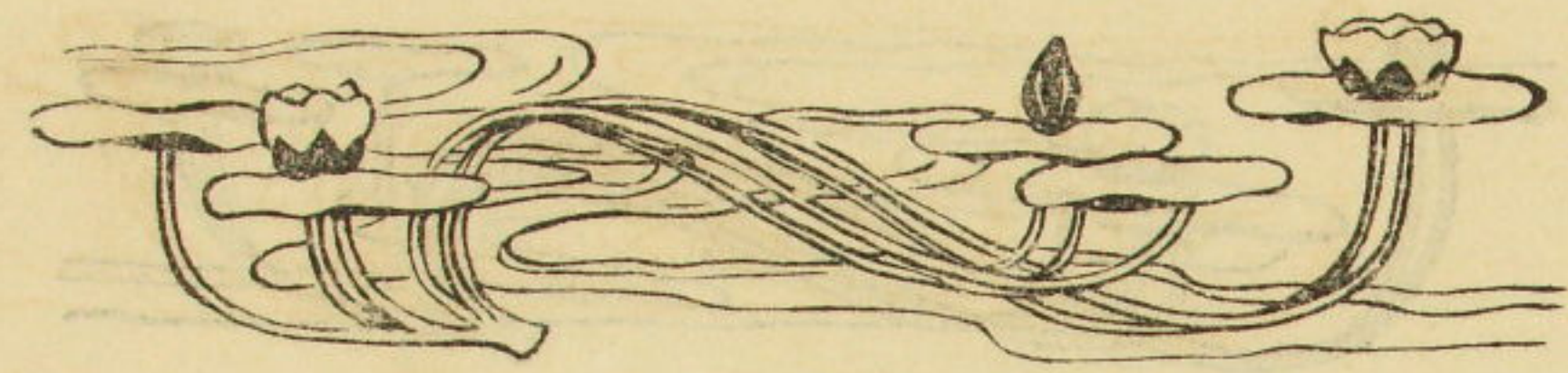
いづくを行くか 分かねども
 聞こゆる羽音 なよゝかに
 霞か 風か 暖かう
 ゆかしき匂ひ そよめけり

五

あまりに 奇しく 妙なれば
 誓ひ 忘れて いぶかしみ
 思はず 眼をば 開けるに
 たちまち 落ちぬ 谷の底



小鳥は いづくに 行きにけん
 影だに見えず 路もなく
 呼べば 答ふる こだまのみ
 尋ね迷ひて 谷 深し



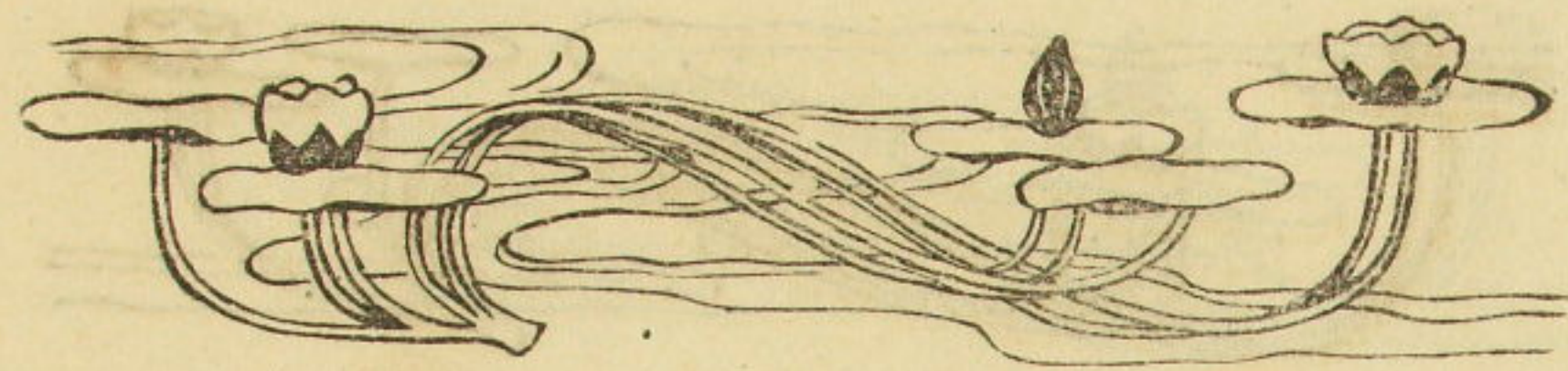
笛を追ふ

空 朦朧の 春の夜に
 霞はこめて 分かねども
 誰か吹くらん 笛の音の
 妙なる調べ 聞こえけり
 ゆかしたと 慕ひ 追ひ行けば
 笛の音 風に 翻り



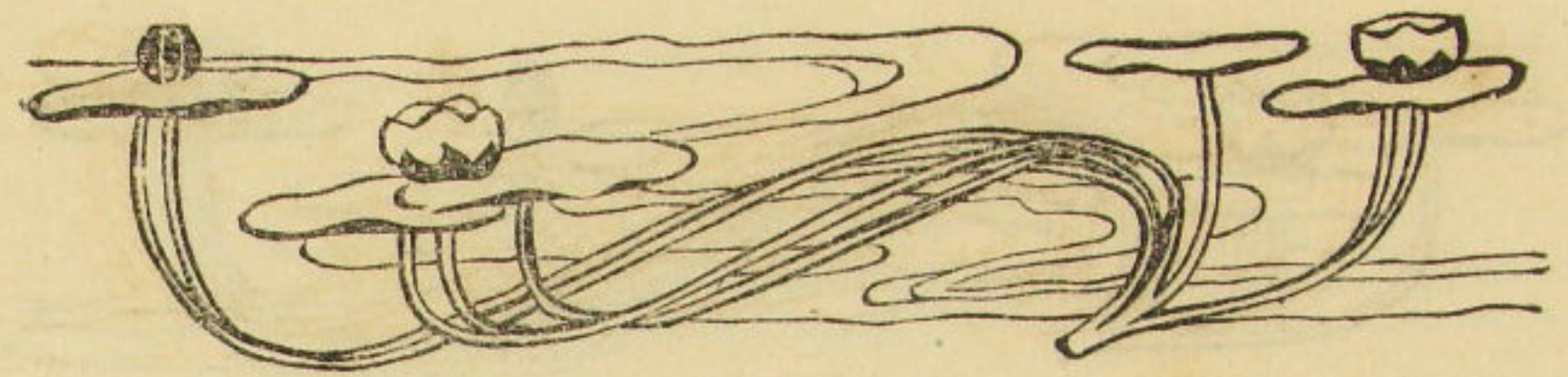
遠く 近く 聞こえつゝ
 隔たる路の 遙かなり

慕ひつ 追ひつ 行き行けば
 笛の音 いよゝ 遠ざかり
 行く路 森に 入り絶えて
 声なき闇に 包まるゝ



玉樓

風 軟らかき 春の野に
 のどけき四方を 眺むれば
 霞の間より ほのかにも
 見ゆる玉樓の ゆかしさよ
 いかなる人の 住むならん
 萌ゆる緑を 踏み行けば



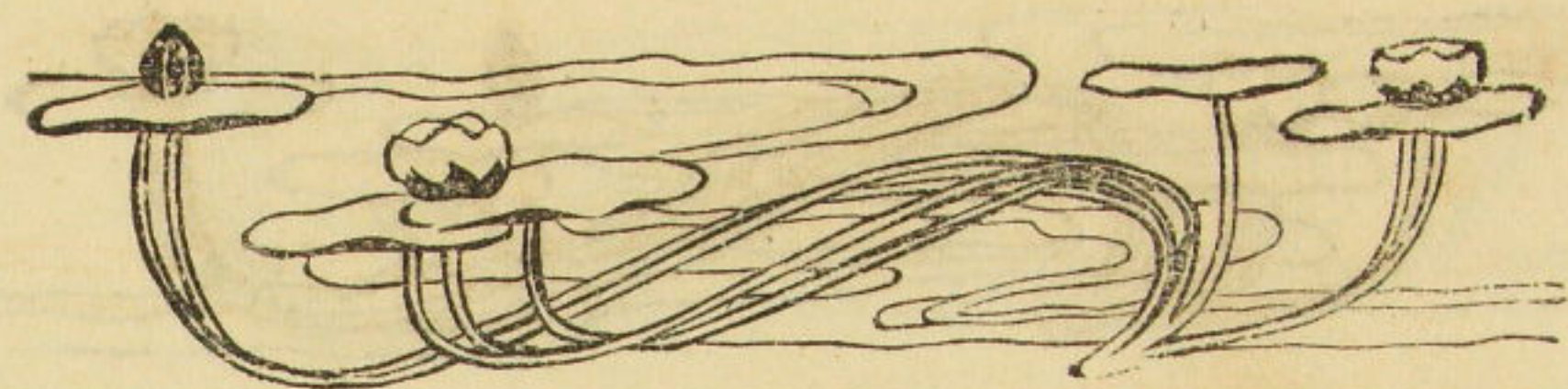
花咲く木々に
かこまれて
玉樓の中
静かなり

我 おとなへぞ
應へなく
木々の花にも
鳥鳴かず
住みけん人の
影もなく
玉樓の内ぞ
むなしかる

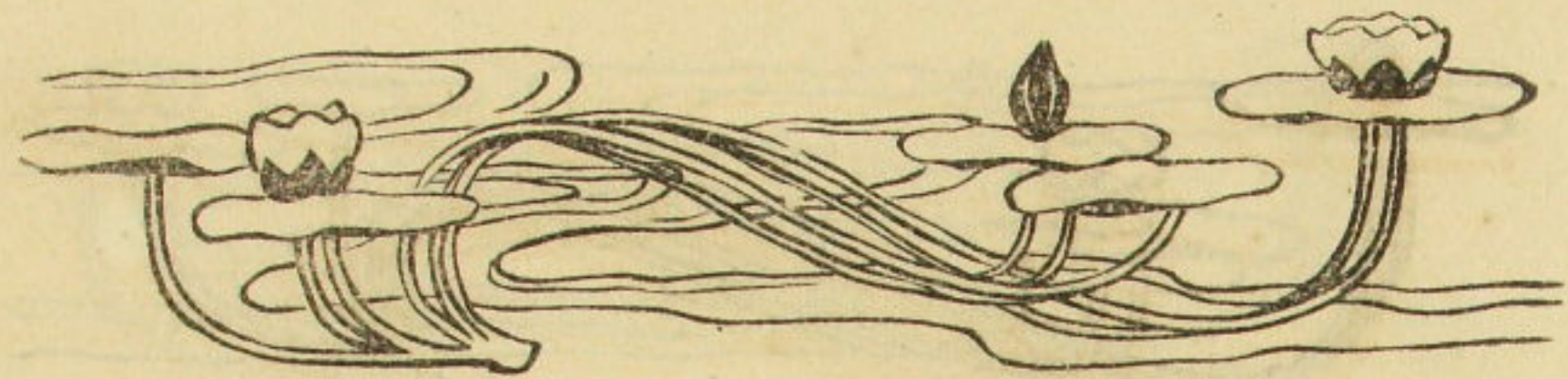


梭の音

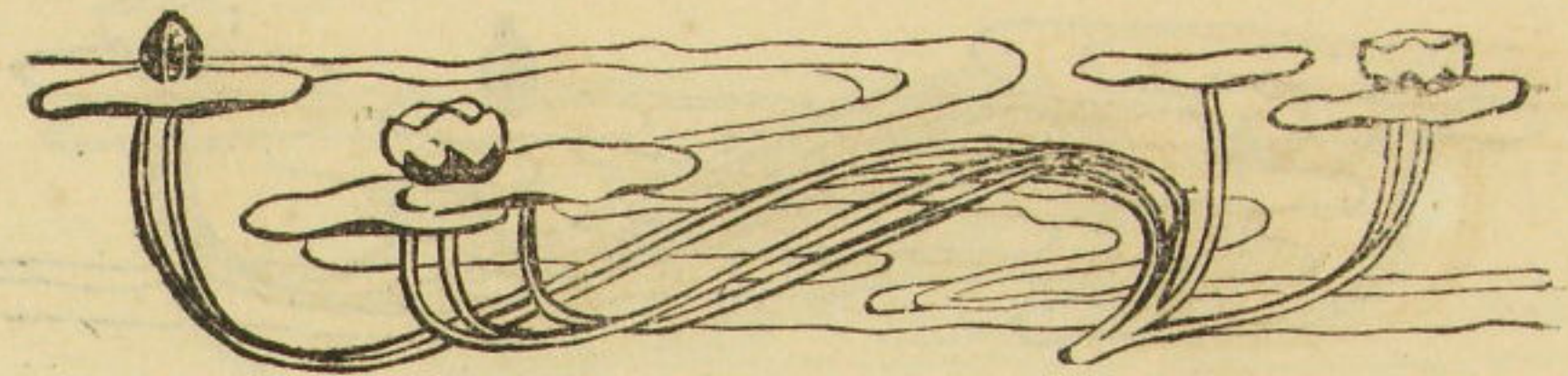
晚鴉の噪ぐ
森の蔭
煙も細き
賤が屋の
緑も小暗き
窓の内
ひとり
をとめの
機を織る
暮るゝ日影に
伴ひて
梭の音
高く
聞こえけり



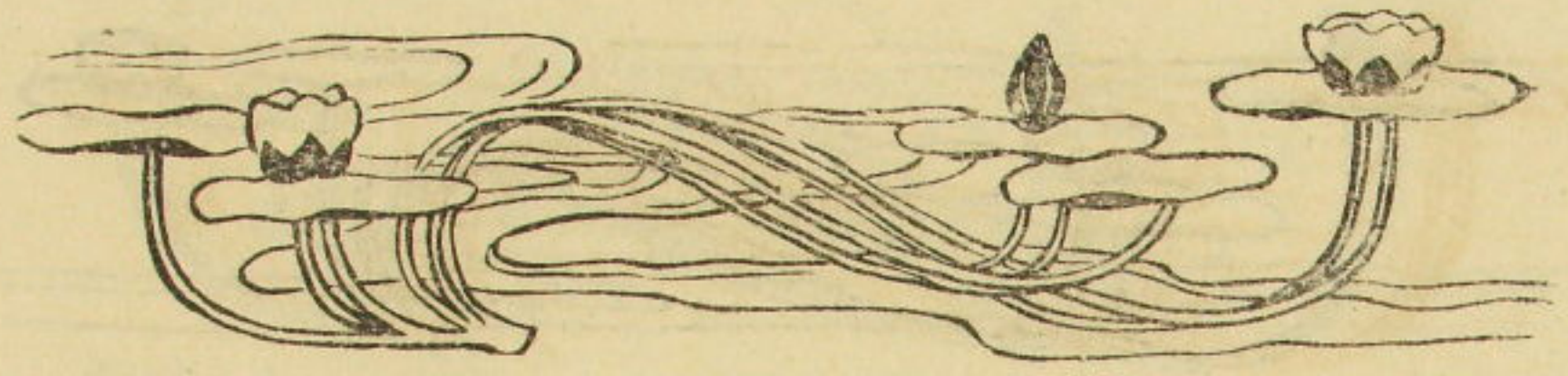
親おやの許ゆるし、その人ひとは
 妹いも脊せ結むすぶに さきだちて
 兵へいに徴めされて 遠とほき空そら
 こゝに 眺ながむる 日ひの久ひさし
 暮くる、日ひ影かげに 伴ともひて
 梭をさの音ね 急せはしく 聞きこえけり
 外そと 百まん萬ばんの 兵へい 動うごき
 戦たたかひ 近ちかきに 起おこらんと
 噂うはさの 高たかう なるにつれ



を とめ の 胸むね の 浪なみ 荒ある、
 暮くる、日ひ影かげに 伴ともひて
 梭をさの音ね 微かけく 聞きこえけり
 さわぐ心こころに 糸いと みだれ
 櫛しもて 筋すぢを たゞせども
 ちひさき胸むねの 結むすぼれつ
 解とく術まへ 知しらに うなだる、
 暮くる、日ひ影かげに 伴ともひて
 梭をさの音ね とだえて 聞きこえけり

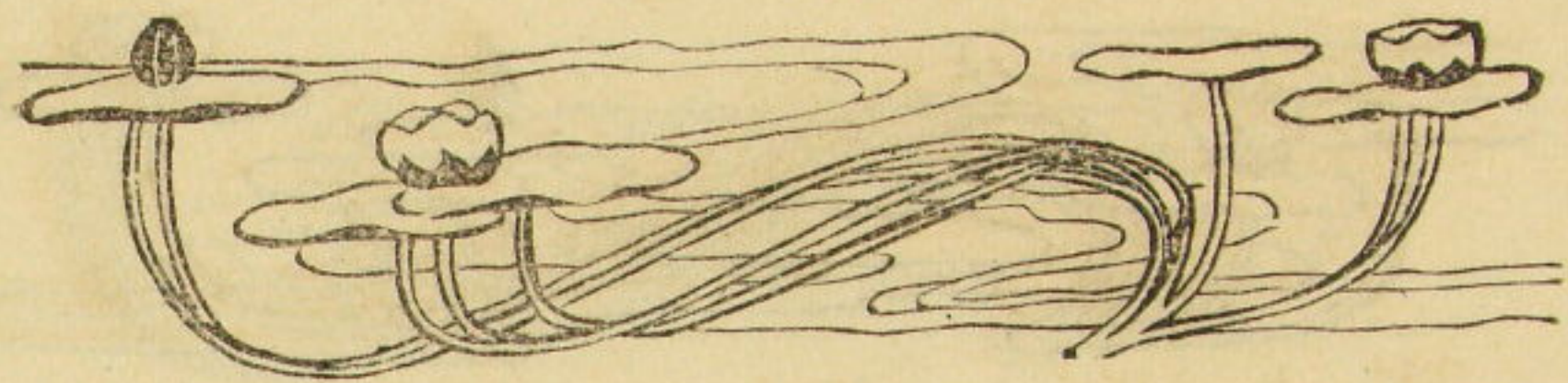


入相の鐘に さそはれて
森の鴉も 静まりぬ
破れし窓の 影 暗く
をとめは 機に うつぶしぬ
暮るゝ日影に 伴ひて
梭の音 聞こえず なりにけり



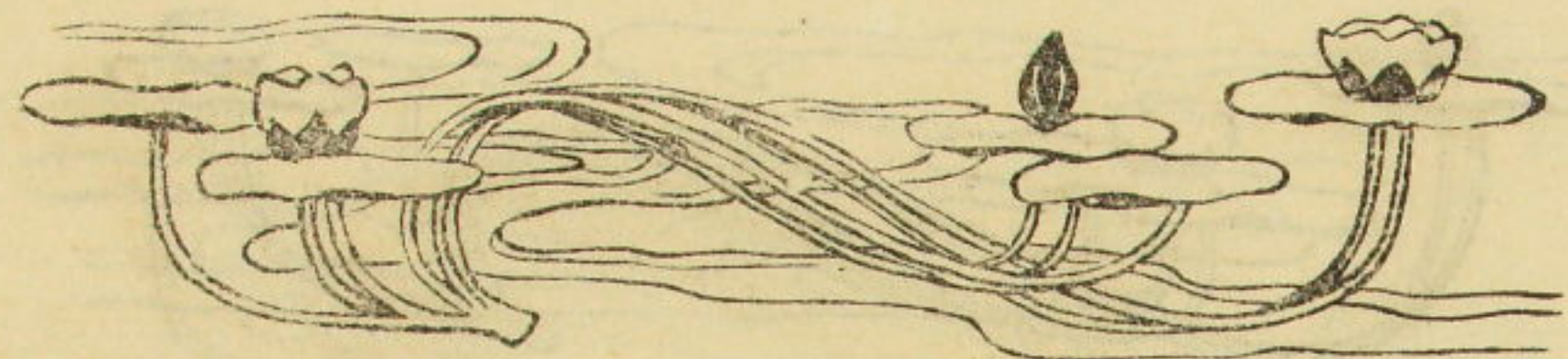
行く春

運命の嵐に さそはれて
梢の花は 地に歸り
繁る若葉に 雨の跡
暮れ行く春に 思ひあり

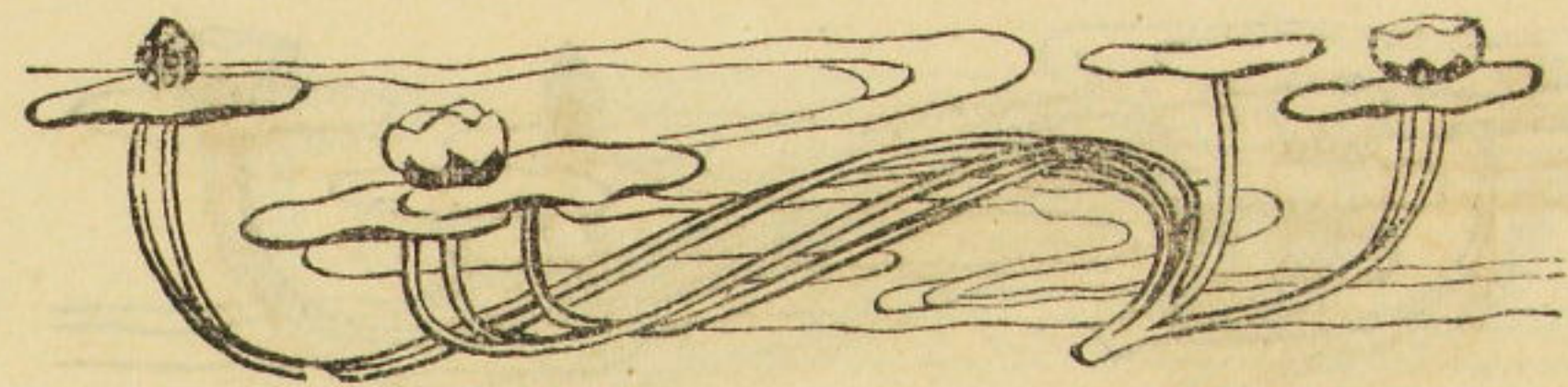


夢の旅人

夢路を辿る 旅人の
 宵闇 深き 森蔭に
 疲れて ひとり 休らへば
 風 軟らかに そよめきぬ
 森のうへなる 空 高う
 明星 ちひさく うちゑめり

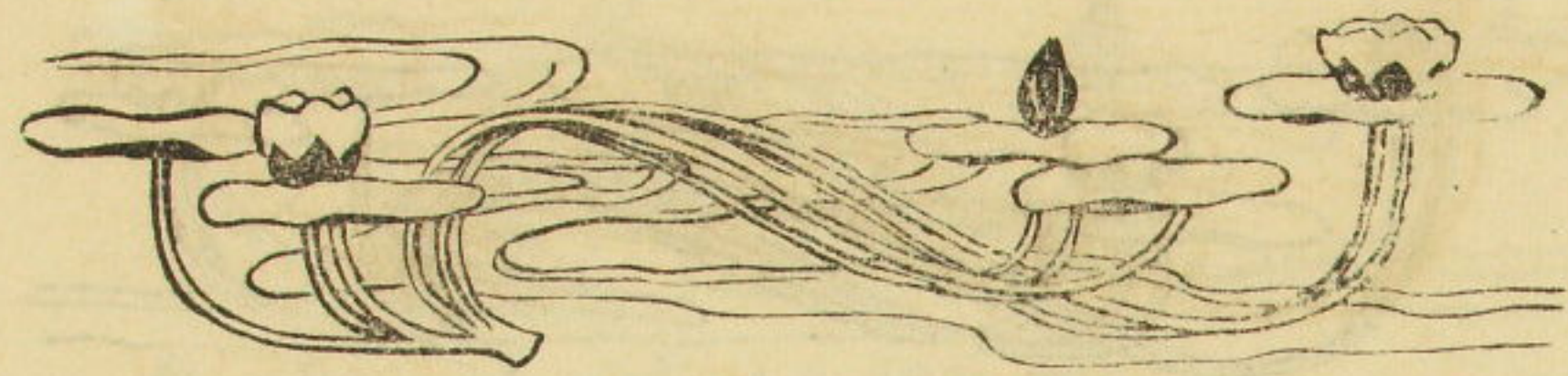


静けき四邊 かんばしく
 妙なる 樂を 奏でつゝ
 天女は 雲居 くだりきて
 聲 なつかしう 寄り添ひぬ
 森のうへなる 空 高う
 明星 ちひさく うちゑめり
 世のいつはりを 越えて來し
 あはれ なやめる 旅人よ
 明くれば またも 世の巷



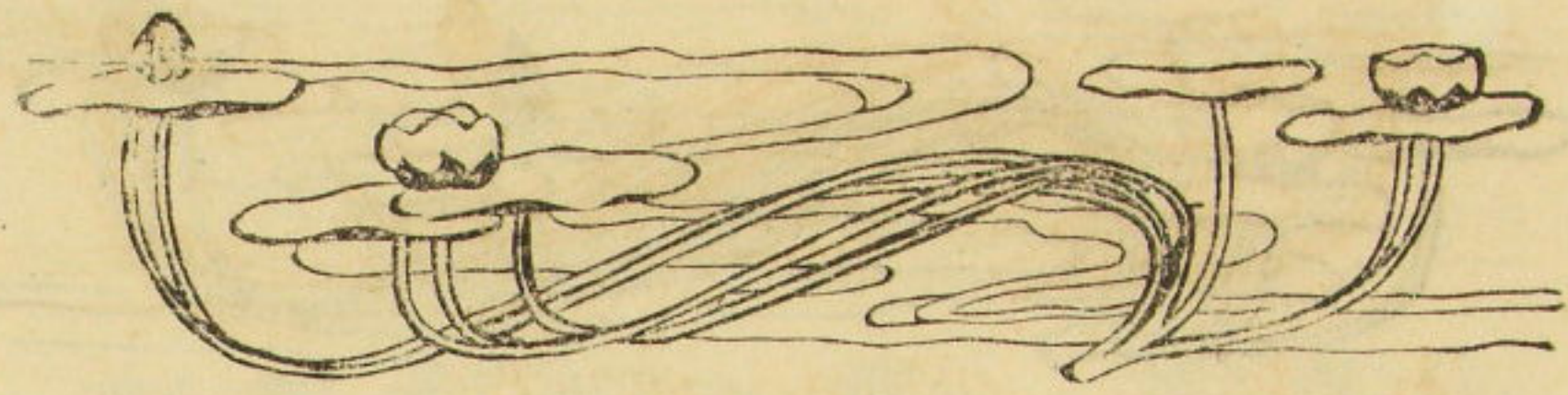
しばし 纏はれ 我が袖に
 森のうへなる 空 高う
 明星 ちひさく うちゑめり

疲れし頭を この胸に
 いざ 休ませよ 安らけく
 天女の口の 觸るゝとき
 柔腕に 彼は 抱かれぬ
 森のうへなる 空 高う
 明星 ちひさく うちゑめり

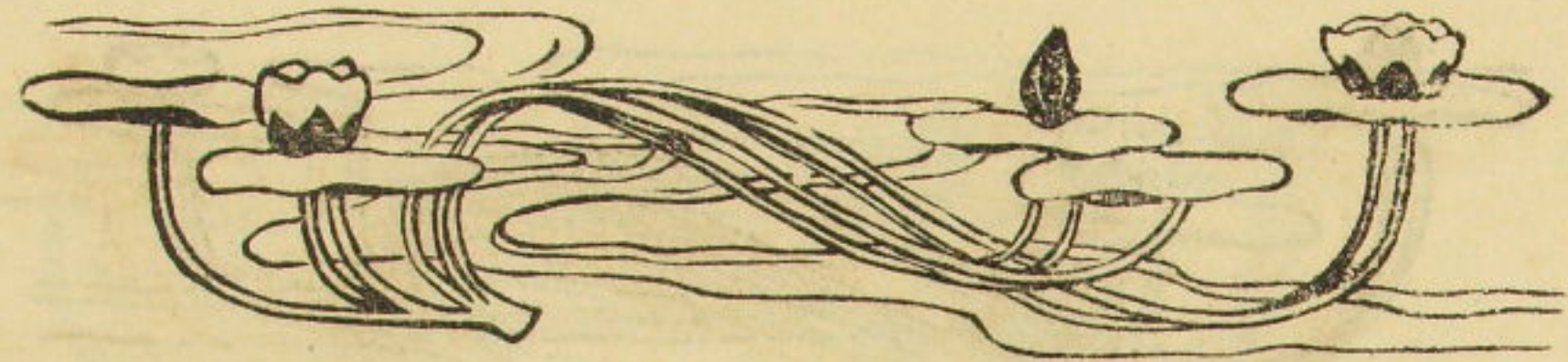


待つ思

待ちに待ちたる 春は来ぬ
 軒端の梅に うぐひすは
 時をたがへず 来鳴けども
 我が待つ人は まだ 見えぬ
 待ちに待ちたる 春は去ぬ
 ひとり さびしう 立つ軒に



雙燕 來りて 巢ごもれど
我が待つ人は まだ 見えす



残 春

暮れ行く春の 田の畦に
残りて咲ける 蓮花草
小聲に 歌を うたひつゝ
少女は その手に 迎へたり
あはれ 優しき 蓮花草
ちひさき腕に 抱かれし

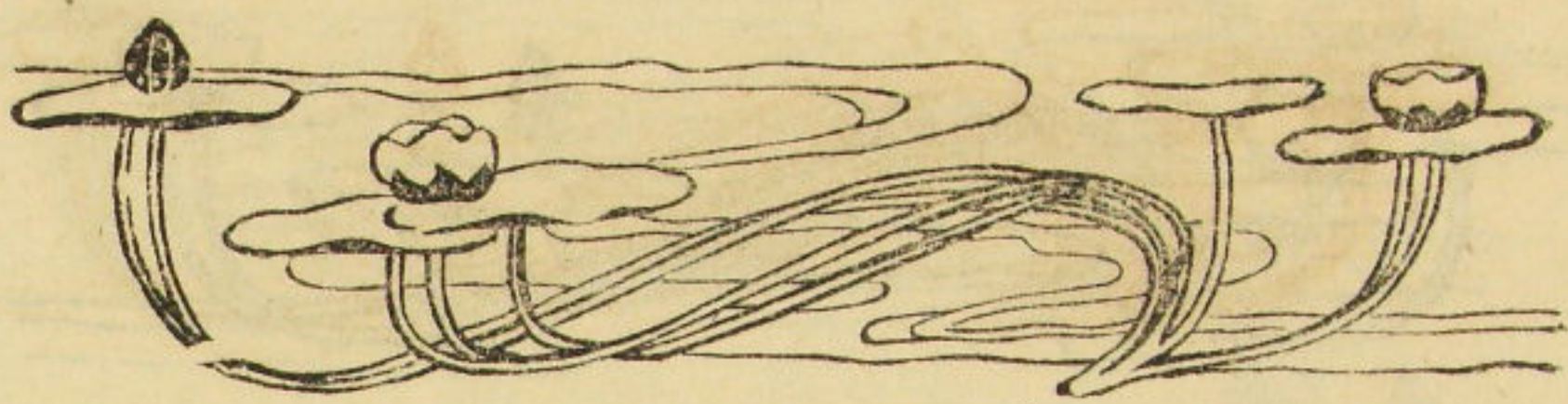


誰か奪へる

神は命じぬ 働けと 土を沃えて
 一望 春野 土沃えて
 緩き流れに 膏あり
 鋤一跡に 麥一斗
 豊けき秋は 腕に鳴る
 いざや 耕さんと 野に立てば
 誰か奪へる 我が鋤を



そよふく風の音もなう
 接吻りて 春に別れ行く



神は命じぬ 働けと
 森 緑なる 山里に
 その木を伐りて 家を建て
 妻も 迎へん 良き妻と
 楽しき家庭 営まん
 いざや 伐らんと 森に行けば
 誰か奪へる 我が斧を



南の窓に 機 一だ
 日なたに 頬を 染められて
 親子 似合うた 縞がらも
 細手に 運ぶ 梭の 綾
 いざや 織らんと 機に向へば
 誰か奪へる 我が梭を



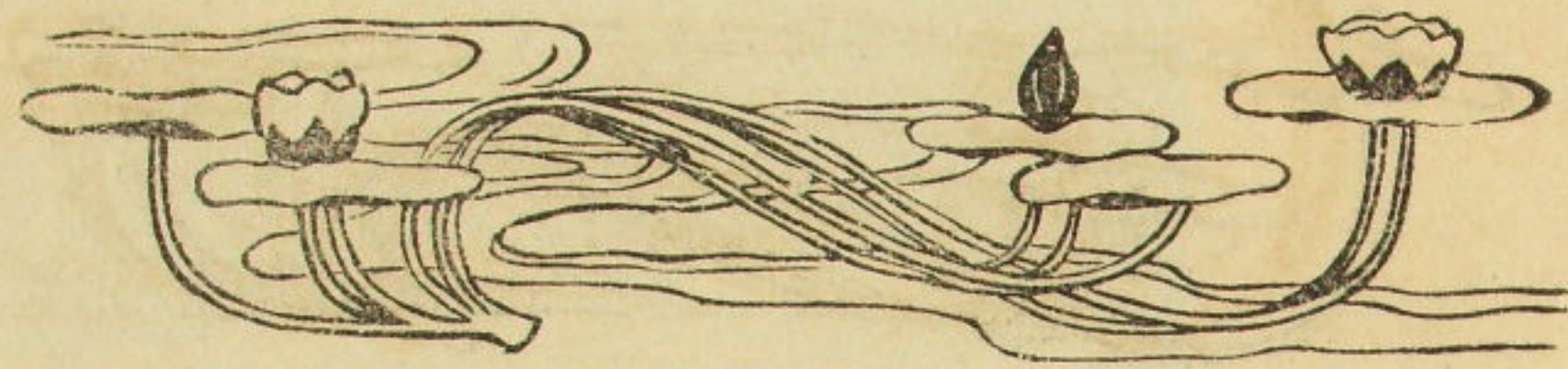
梨下の女

庄屋が裏の 梨の花
 文よむ女 月 おぼろ
 聲も 思ひも 胸のうち
 巻くや ひらく 一片の
 花ぞ散りくる 文のうへ
 見あぐる空に 雁一羽
 春を殘して 去る友の
 群れにおくれて 急ぎ行く



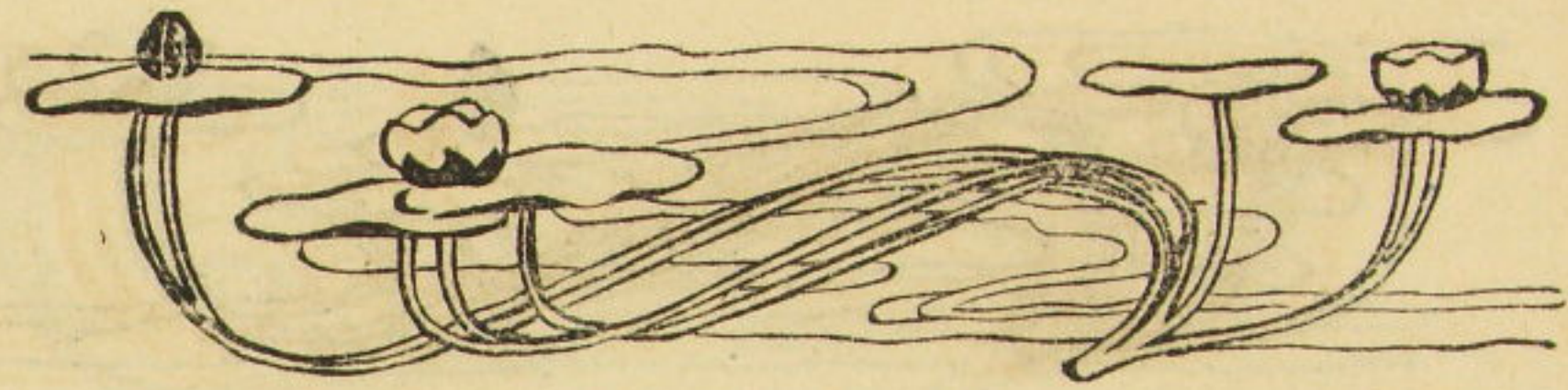
うるはしき秘密

なが ふくよかの 胸底に
 妙なる鍵もて 閉ざしつゝ
 ひとりのほかに 開かざる
 包む秘密の うるはしき
 深く 閉ざして 包めども
 頬 くれなるに 匂へるを

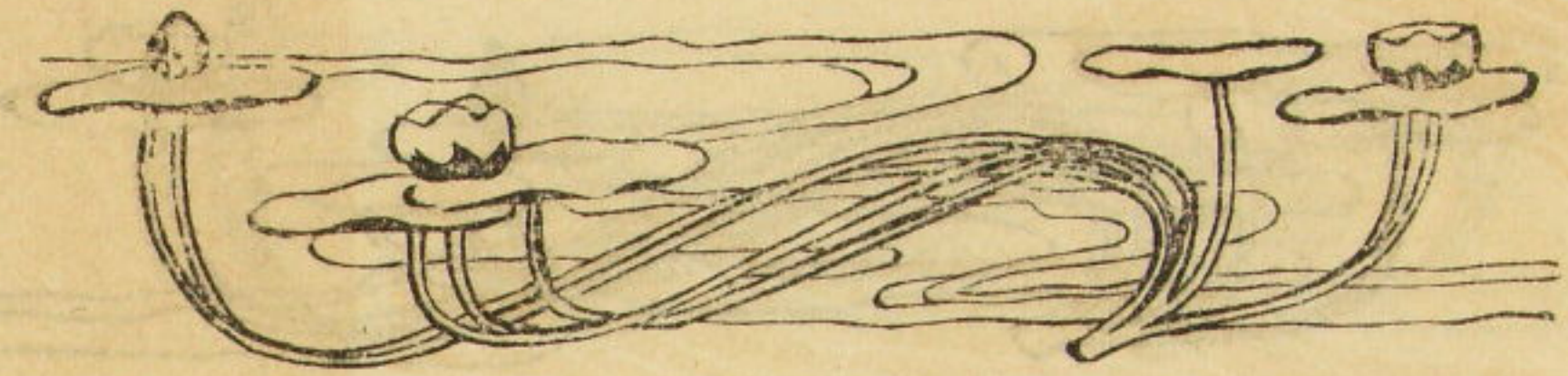


菜の花

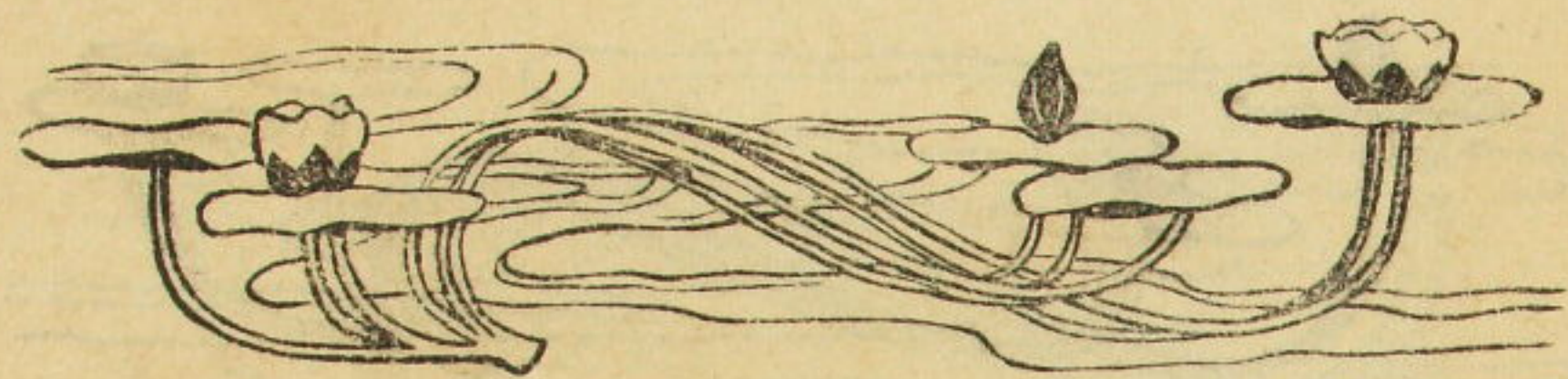
わたしや 野中の 菜たねの花よ
 句ひ 菫の 香はなけれども
 粧ひ 牡丹の 色 なけれども
 姿は 百合の 品 なけれども
 わたしや あるぞい 思ひの人の
 浮気しやんすか 氣に氣にかゝる
 さそふか 憎や 風もそよ〜



優しう 守る その秘密
 誰に開かん 春の來ば

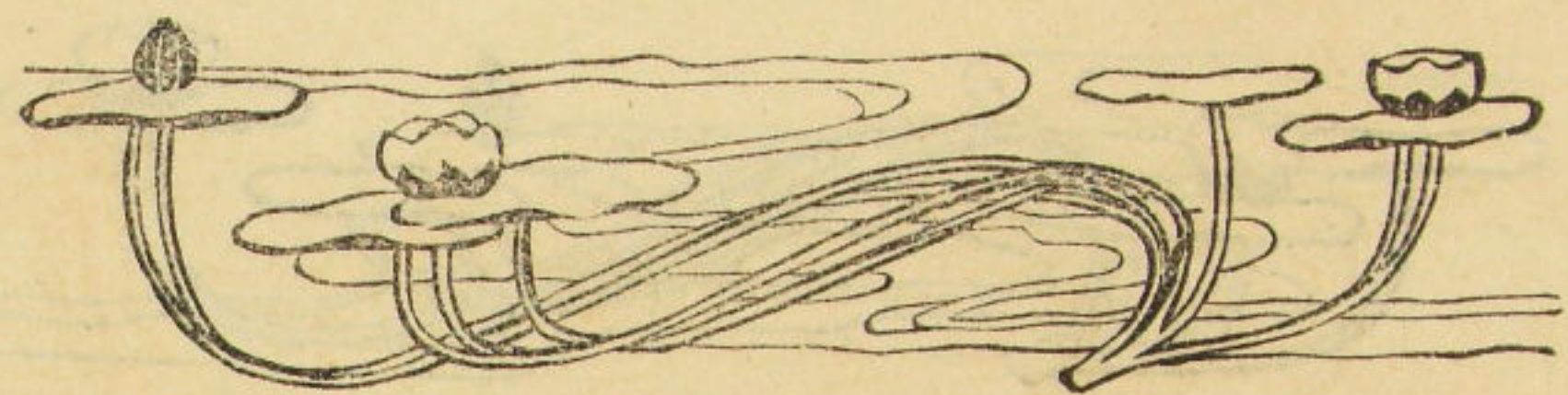


優しい羽の
 あれ ひらくと
 まゝになるなら
 追うても行こが
 心配りに
 はや 春 暮れる



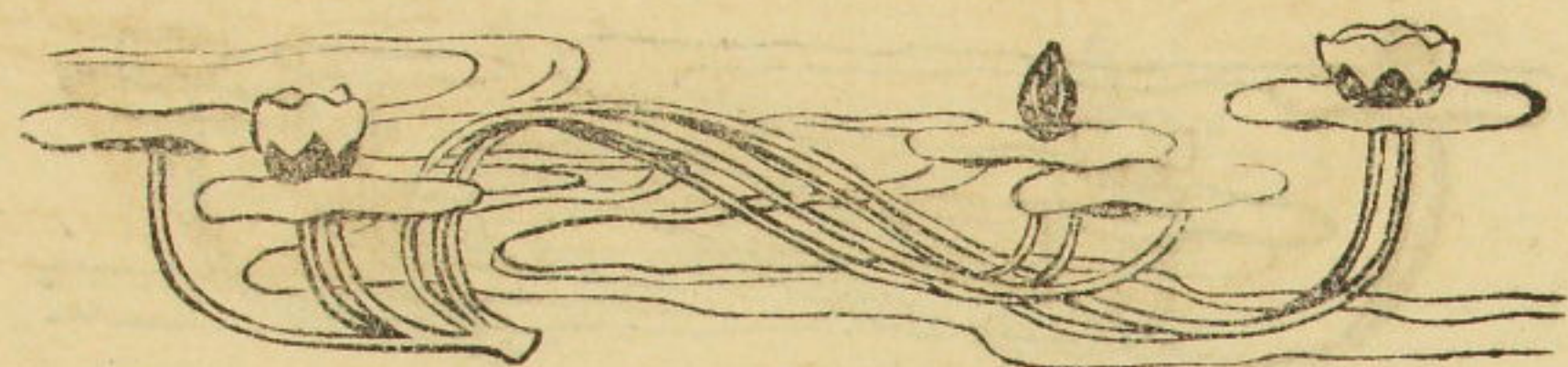
舞
姫

言はんすな
苦界に埋る身じやとても
いつも離さぬ舞扇
胡蝶と共にひらくと
樂しう送るが罪かいな

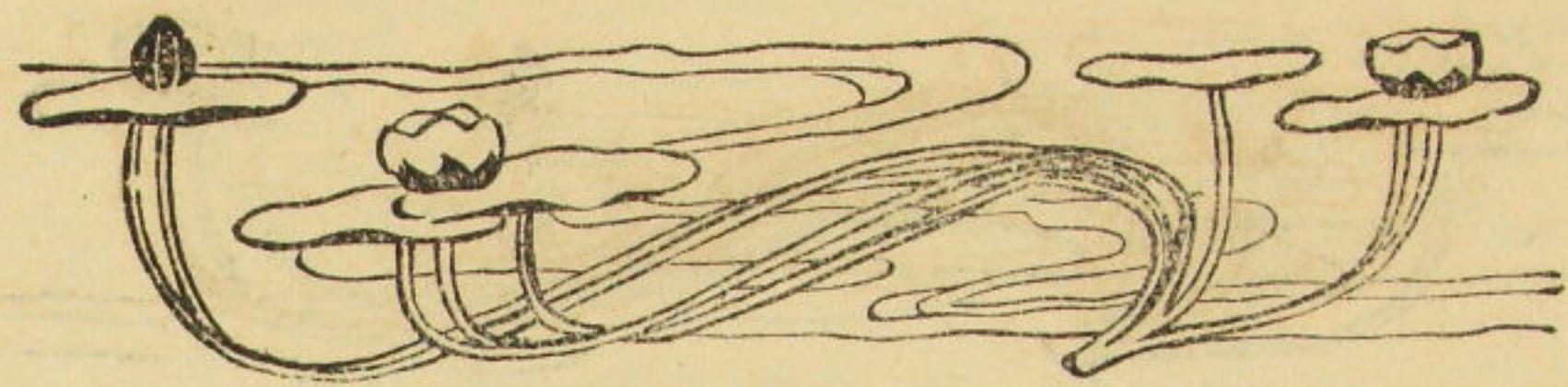


柴垣

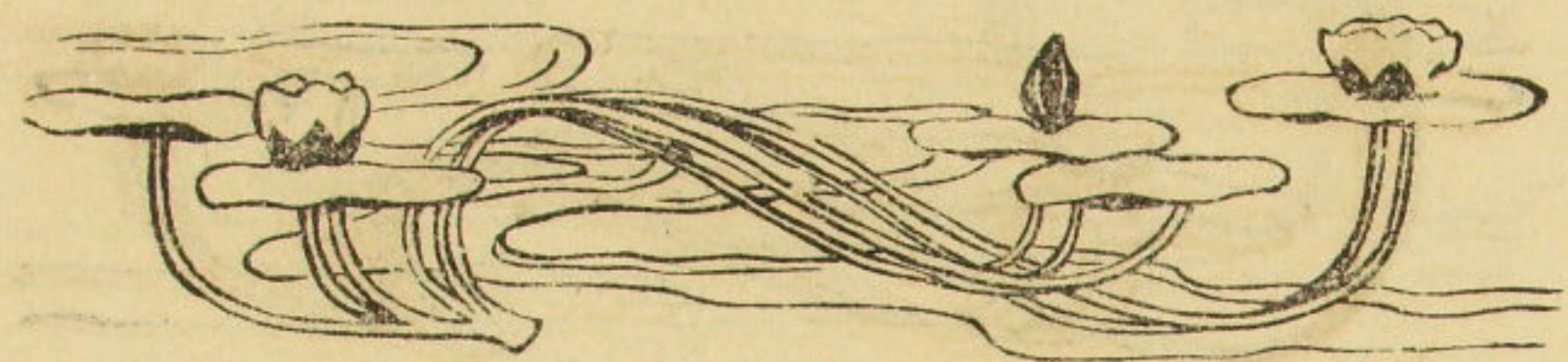
柴の垣根の内と外
 こゝに歌へばあなたにも
 合せて歌ふ春の日に
 桃天々の花の影
 菴を敷きて睦まじう
 我は彼の女と遊びけり



並べる雛のその前に
 菓子こを小皿こに盛りわけて
 摘つみし嫩菜よを飾かり添へ
 雛ひなの妹いも春せを祝いわひつゝ
 言いはねどちひさき胸底むなに
 ふたりの思おもひ燃えそめし
 桃ももの花はな咲さき花散はなりて
 いくたび重かさぬ春毎はるごとに
 垣かきは昔むかしにかはらねど



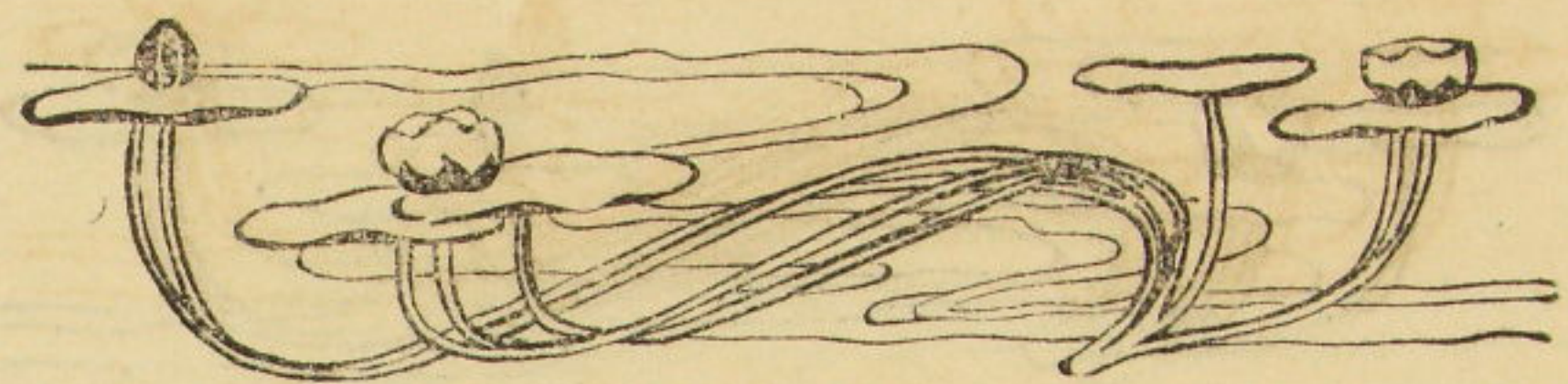
次第しだいに隔へだたる 内うちと外そと
 こゝに聲こゑなく わなたにも
 影かげだに見みえず なりにけり



路傍ろぼうの花

かよわき その身みを踏ふまるゝも
 世よの通かよひ路ぢに 咲さきいでゝ
 ちひさく 匂におふ わはれさよ
 路傍ろぼうに咲さける 草くさの花はな

風光ふうくわう 清きよき 岡おかの上うへ
 金殿きんでん 玉樓ぎよくろうの 花はなの園その



榮華の誇り知らずして
ひとり路傍の塵に咲く

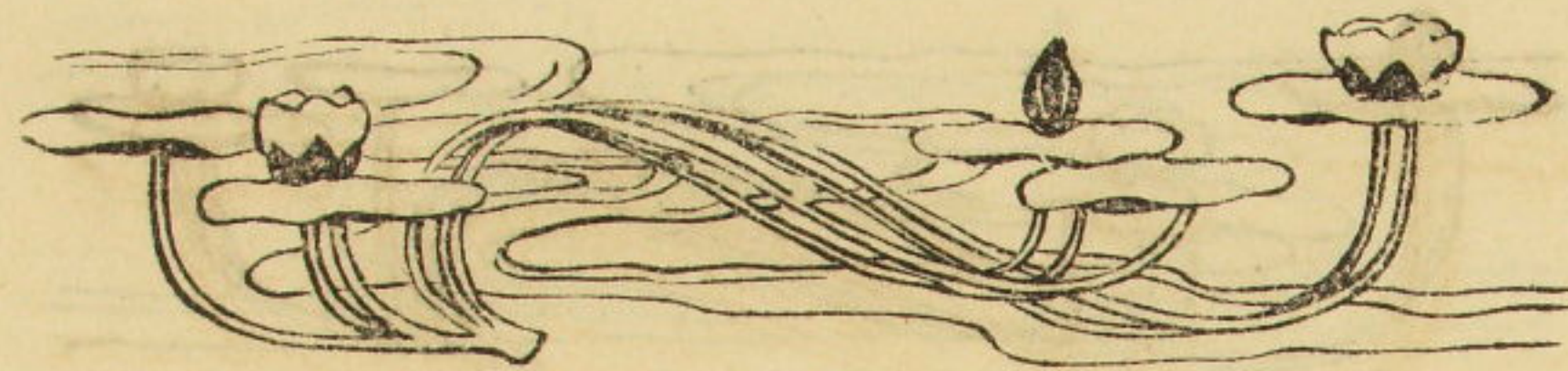
往き來の人に手折られて

やがてつれなう捨てらるゝ

あはれ優しき草の花

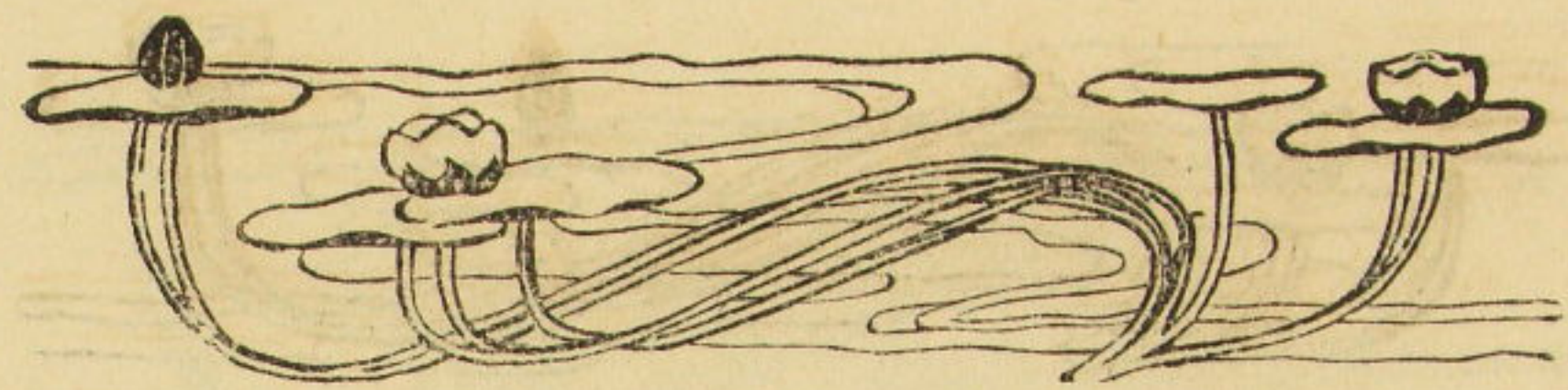
恨まず匂うて送るかな

神の大命なれは知る
踏まれながらも草の花



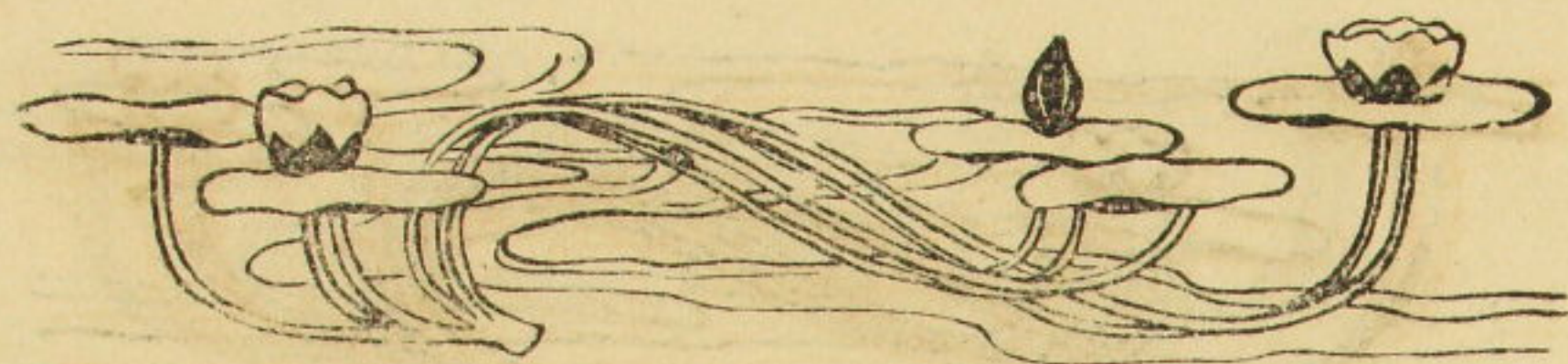
ひとり名もなく友もなく

あはれ路傍に世を送る



夏の夕暮

草刈り 歸る をとめどの
優しき歌に 送られて
夕日は 次第に 影 遠く
あやなす雲の 中に入り
接吻に燃えし くれなゐは
をとめの顔に 暮れて行く



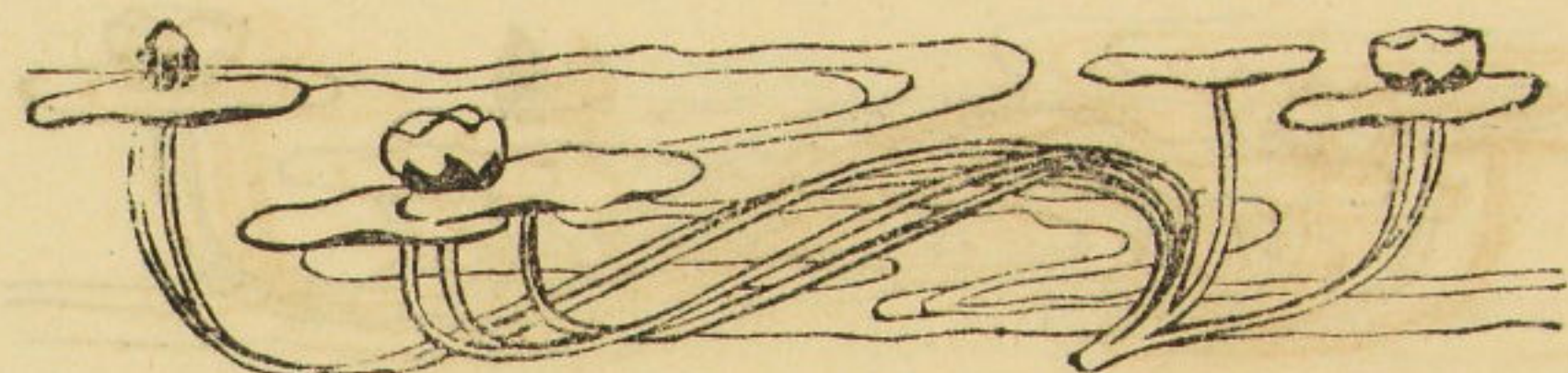
野中の流

我は 野中の 流れなり
野中の ちひさき 流れなり
田畑の 牧場を 潤すは
大命 守る 我が務め
緩き 我が瀬の 浅くとも
いとしき めだかの 世界なり

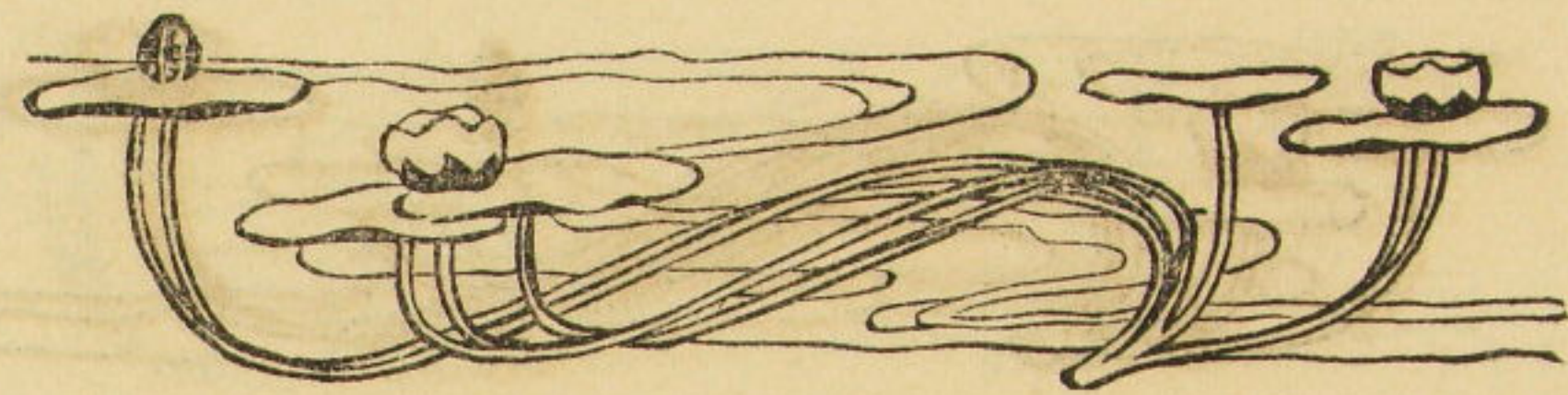


聲こゑ いい 沙さ 四し 音ね た た
 づづ 漠はく 顧こ も ヲ ヲ
 ほほ くく をを ひひ 茫ぼう 香か 見み 見み
 がが らら かか にに とと 々々 とと 涯げ もも なな くく 路みち もも なな くく 路みち もも なな くく 路みち もも なな くく
 たた ヲヲ 迷まよ ふふ とと きき 夏なつ のの 旅たび
 進すす めめ

沙漠の旅



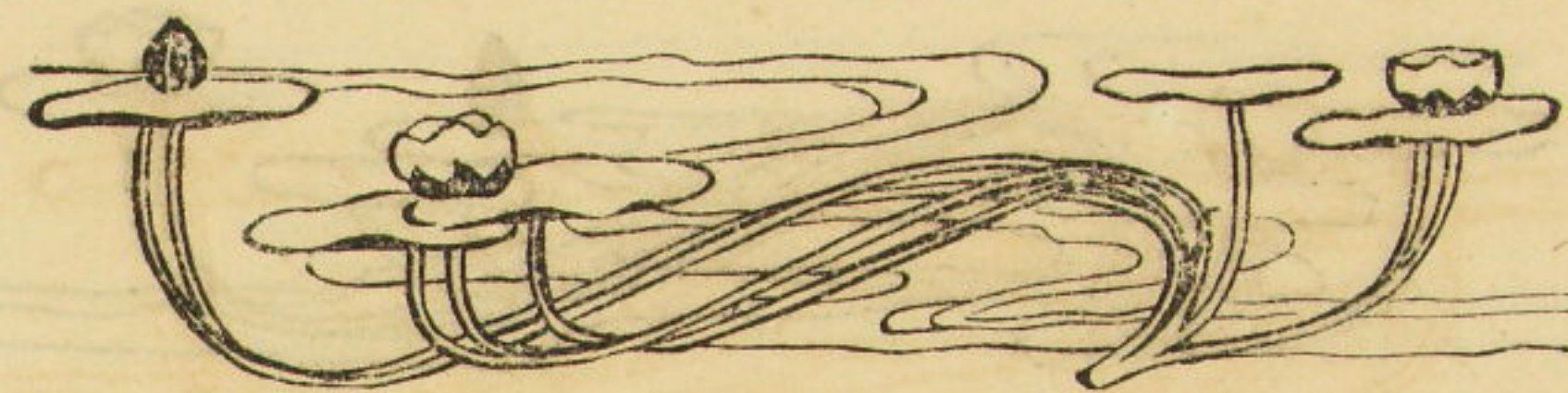
野の 我わが 心こゝろ 平へい 我わが 銷さう
 中なか は 野の ゆゆ 和わ の 親おや びび
 の ちち ひひ ささ ささ 野の 中なか の 流なが れれ なな りり 流なが れれ なな りり 流なが れれ なな りり
 流なが れれ なな りり



たゞ見るものは空の色
 照る日 烈しく 熱を撒き
 焼ける沙地に 足 爛れ
 負へる重荷の 堪へがたく
 流るゝ汗を 拭きもえず
 涯なきさを 望みつゝ
 息も 涸れなん そのときに
 聲も すゝやかに たゞ 進め
 たゞ 見るものは 沙の色



倒れつ 起きつ 腕けども
 進むに 今 力なく
 四顧 茫々の 沙のうへへ
 重荷を こゝに いざ 捨てん
 疲れ 苦み 悩みつゝ
 望みも もはや 絶えんとき
 聲も おとそかに たゞ 進め
 遙かに 木立 見えにけり



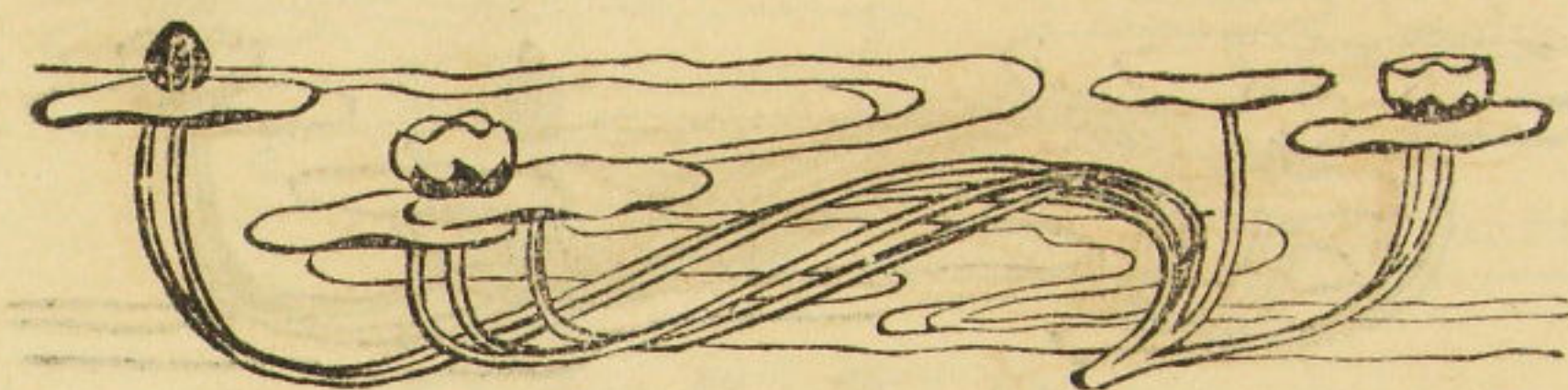
みさを

緑 みどり あえかの 芭蕉葉の
 揺らるゝ風 かぜ に 堪へもえず
 打たるゝ雨 あめ に 堪へもえず
 あはれや 脆 もろ う 破れぬるは
 人の操 みさを に 似たるかな



草も木も

草 くさ も 木 き も
 恵 めぐ みの 露 つゆ の 滴 した れる
 母 は の 乳房 ちゆうぶ を 含 ふく みつゝ
 夜 よ の 静 しず けさに さそはれて
 安 やす けき 胸 むね に 眠 ねむ りけり
 彼等 かれら の 夢 ゆめ に 入 い るものは

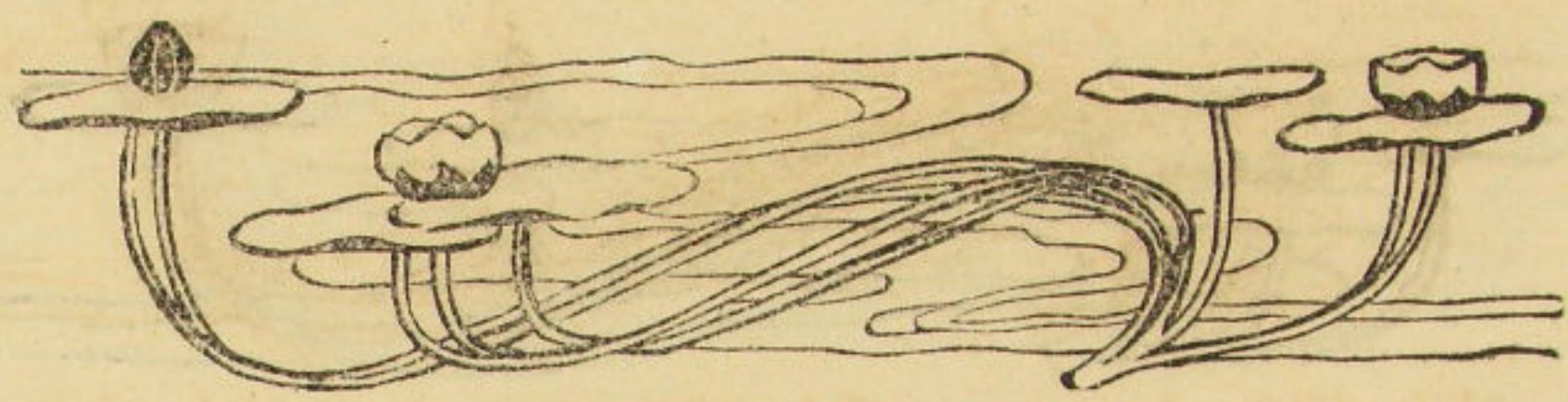


晝間ひるま 眺めしながめし 人の世ひとよ か
 上にうへに 煌めくきらめく 小星ちひさしほし
 下にしたに 優しきやさしき 蟲の歌むしのうた

草くさも 木きも
 東ひがしの光ひかりりに 覺さまされて
 今日けふを さやく 眺ながむれば
 接吻すくみの風かぜの そよくと
 霞かすみの帳とばり 捲まきとりぬ

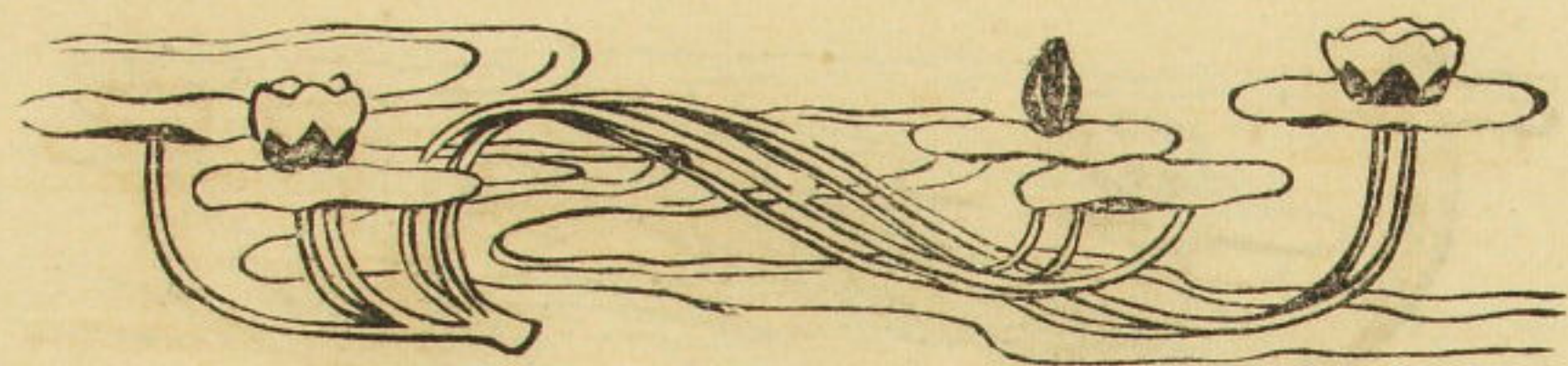


緑みどりに 匂におふ 唇くちびるの
 残のこれる 乳ちのちの 玉たまの上うへに
 廣ひろき 望のぞみを 浮うかべつゝ
 昇のぼる 朝あさ日に 輝かがやけり



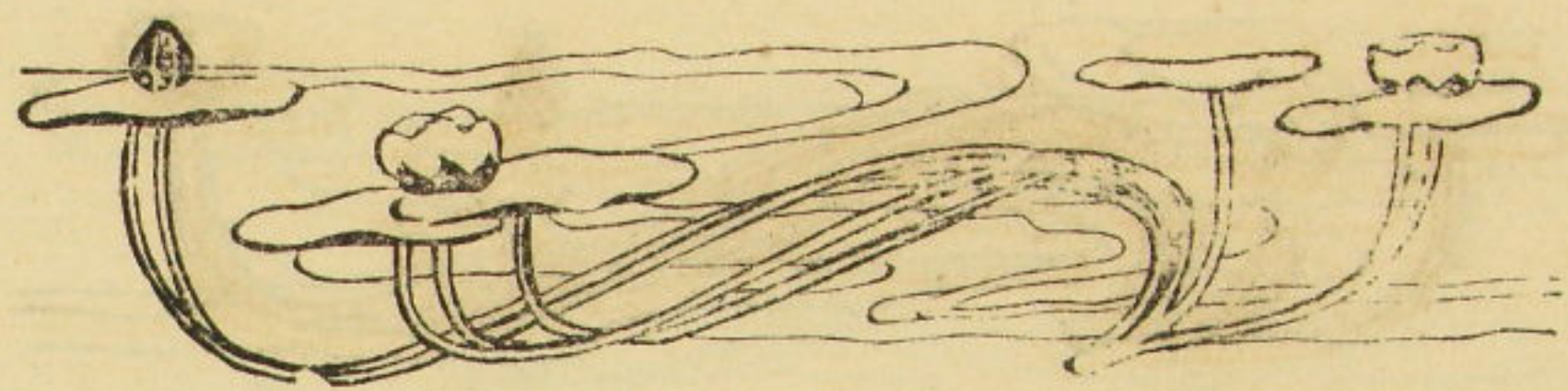
川の流

人の心をたとふれば
絶えず流るゝ川の如
その源は清めるなり
流れの清めるときもあり
流れの濁るときもあり
或るひは瀬あり淵もあり



人の心をたとふれば
絶えず流るゝ川の如
その源は静かなり
畔くが如く流るあり
吼ゆるが如く流るあり
或るひは細くまた濫るあり

人の心をたとふれば
絶えず流るゝ川の如
清むと静かはその源よ

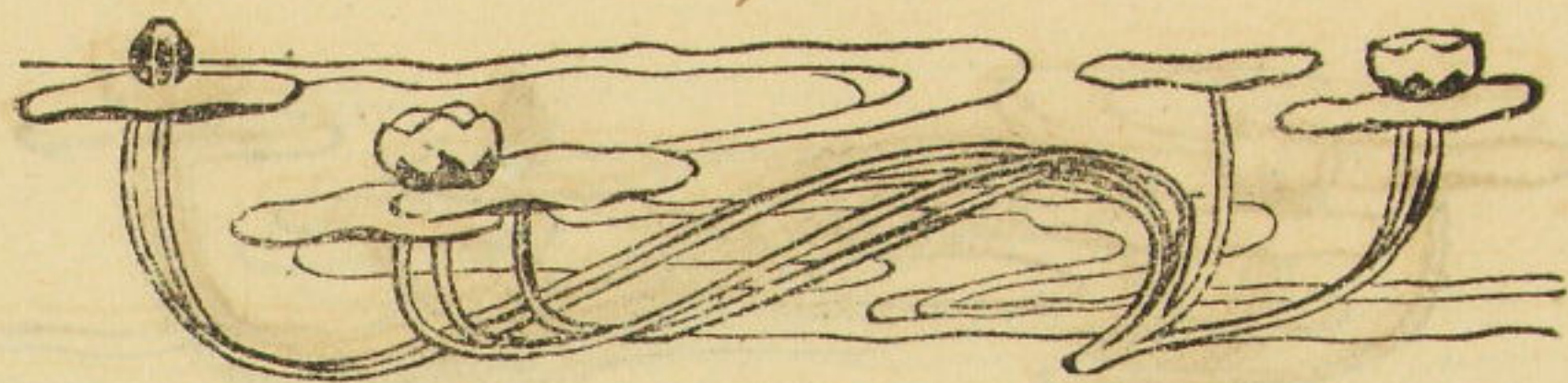


碧と 平らは その末よ
 川の流るゝ音に聞け
 その流るゝは 希望なり



孤つ屋

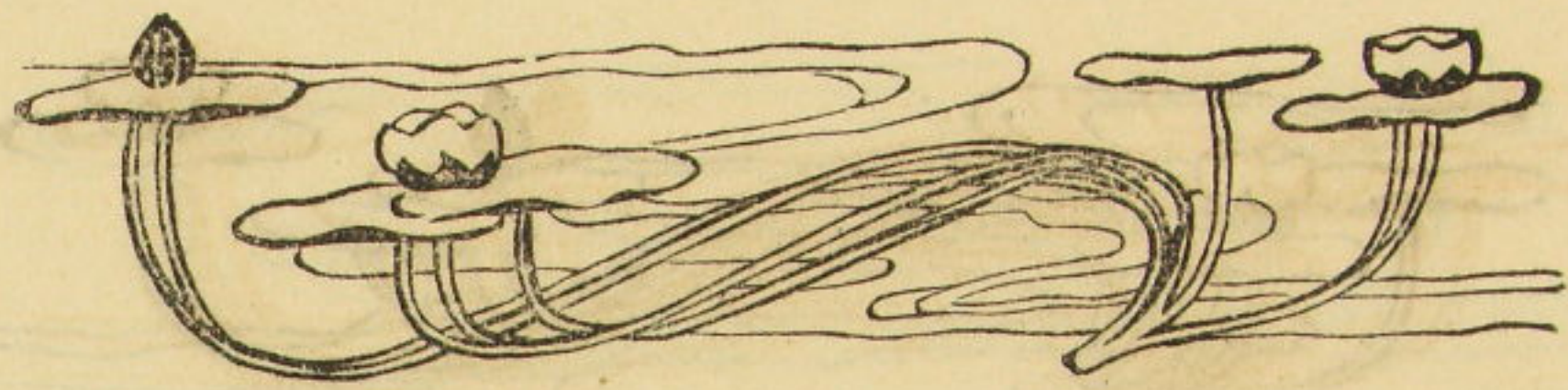
小鳥は歌ひ 蝶は舞ふ
 花 爛漫の 春の郷
 若き血汐の 燃ゆるとき
 人ひとたびは 行くところ
 我も辿りて 住まはんと
 はじめて 出づる ひとり旅



風 かぜ うらゝかに 空 そら 晴 は れて
 門 かど 出 で の 朝 あさ の さわやかに
 想 おも ひはゆかし 春 はる の 郷 さと
 山 やま も 隔 ひだ てず 近 ちか かる
 行 ゆ く 旅 たび 勇 いさ む 路 みち すがら
 風 かぜ 向 む き やうく 變 かは り來 き ぬ
 晴 は れたる 空 そら の いつしかに
 曇 くも り 掩 おほ はれて 風 かぜ 寒 さむ う
 野 の 草 くさ の うへに さらくくと



眺 なが めは 淋 さび し 野 の も 山 やま も
 散 ち りしく 落 おち 葉 は 踏 ふ み分 わ けて
 行 ゆ けば 行 ゆ くほど 風 かぜ 寒 さむ し
 淋 さび しい 小 こ 雨 さめ そぼふりて
 心 こゝろ 細 ほそ さの 古 ふる る 路 みち を
 急 いそ げど かひなう 日 ひ は 薄 うす く
 路 みち 問 と ふ 人 ひと も あらなくて
 曠 ひろ き 野 の 末 すえ を さまよひつ
 風 かぜ もろともに 西 にし へ 行 ゆ く



行くも 戻るも 路 絶えて
 眺むるかたに 庵あり
 疲れし足を 踏みしめつ
 亂るゝ 枯草 かき分けて
 行けば 荒れたる 孤つ屋の
 住む人もなく 風雨 蕭々

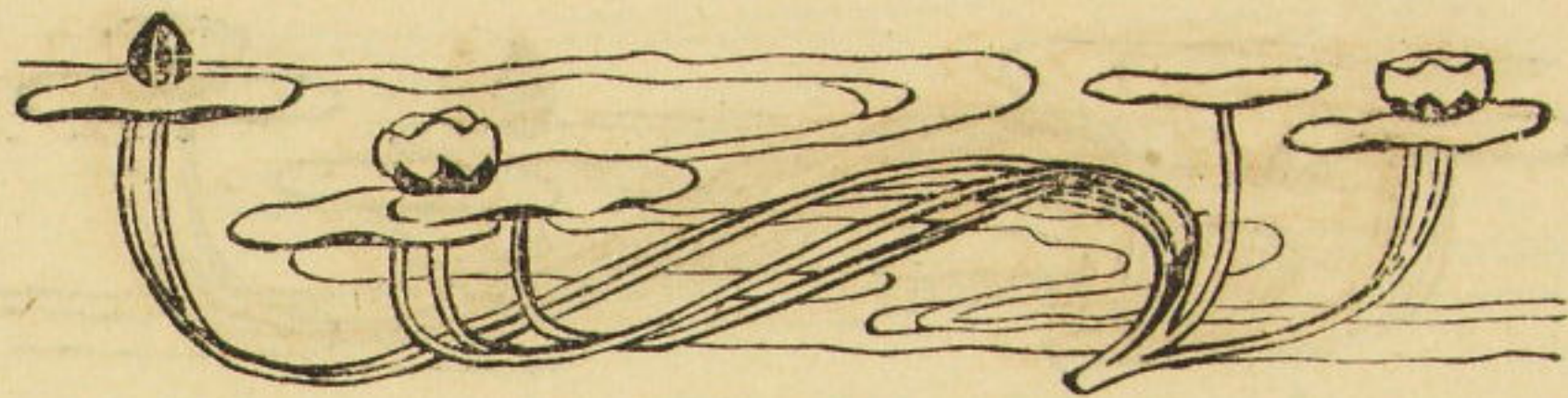


行く雲

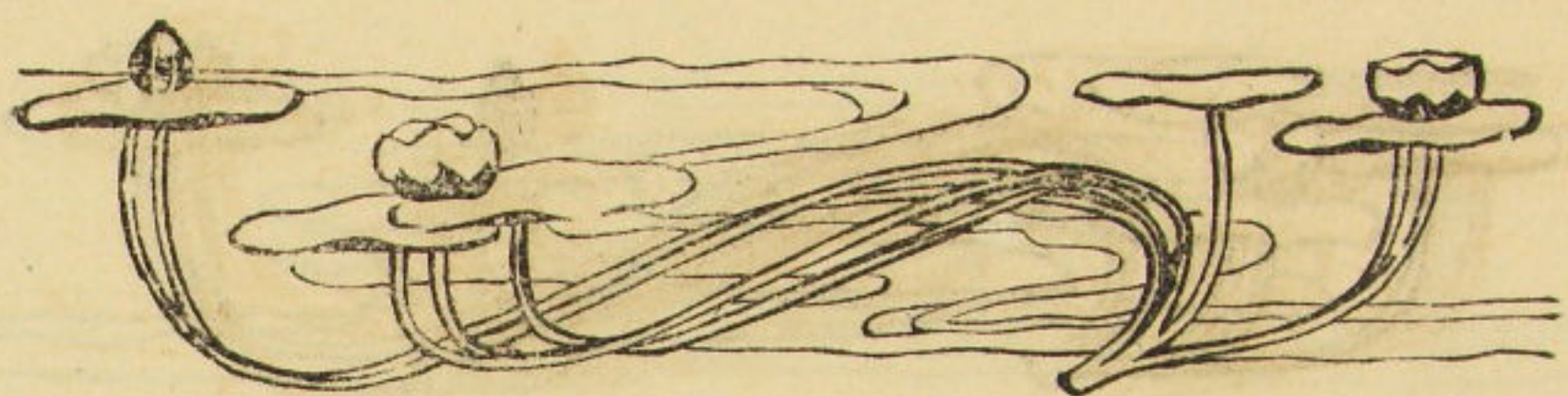
眺むるかたに 行く雲よ
 なれは 心に まかせつゝ
 自在に 廣き 空を飛ぶ
 眺むるかたに 行く雲よ
 海山 遠き そのさきに
 なれが 飛び行く 空の下



翼^{つはさ}を 我^{われ}に かせよかし
眺^{なが}むるかたに 行く雲^{くも}よ



意^い中^{ちゆう}の 人^{ひと}は そこ^{そこ}にあり
海^{うみ}山^{やま} 遠^{とほ}き その^{その}さきに
萬^{ばん}里^りを 走^{はし}る 我^{われ}が 思^{おも}ひ
翼^{つはさ}を 持^もたで 胸^{むね}にあり
結^{むす}ぼる、胸^{むね}を さまよへど
萬^{ばん}里^りを 走^{はし}る 我^{われ}が 思^{おも}ひ
眺^{なが}むるかたに 行^ゆく雲^{くも}よ
我^{われ}の 思^{おも}ひを のせよかし



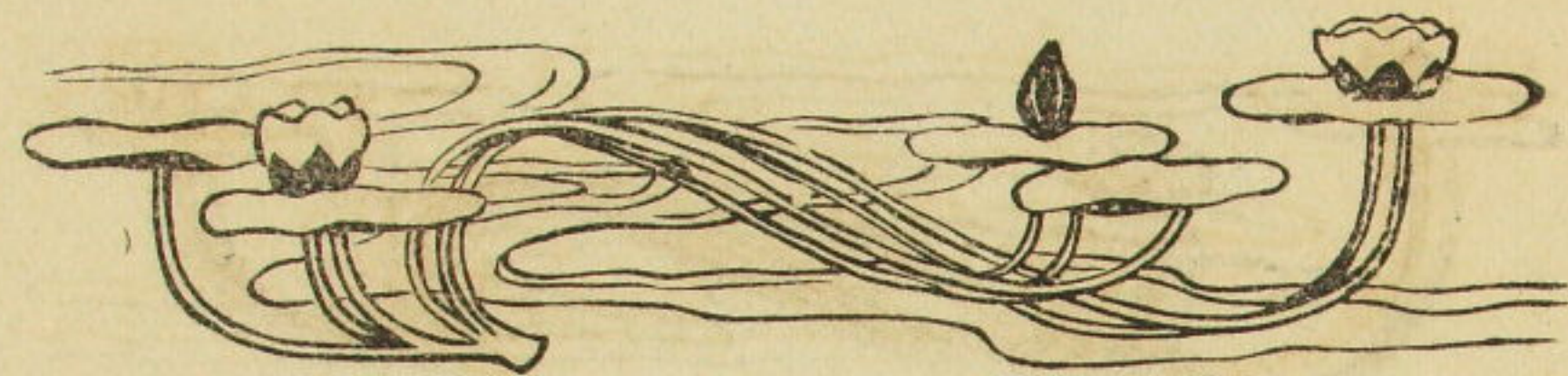
破窓の秋

煙は 細う 朝夕に
朽ちたる軒を のぼれども
あるじは 誰ぞや 音もなう
木の葉 散りくる 破れ窓に
秋海棠の 寄りて咲く



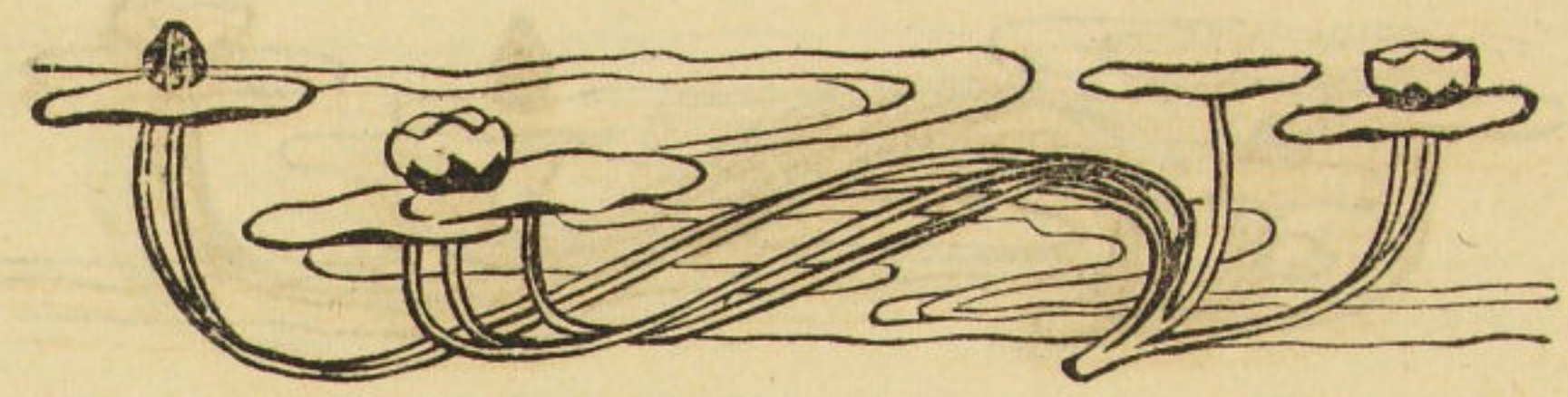
月下の蟲

少女は 琴を とりあげて
調べ つくして 奏づれど
葉末の露に はぐゝまゐる
月下の蟲に およばざる
少女は 琴に あはせつゝ
節 おもしろう 歌へども

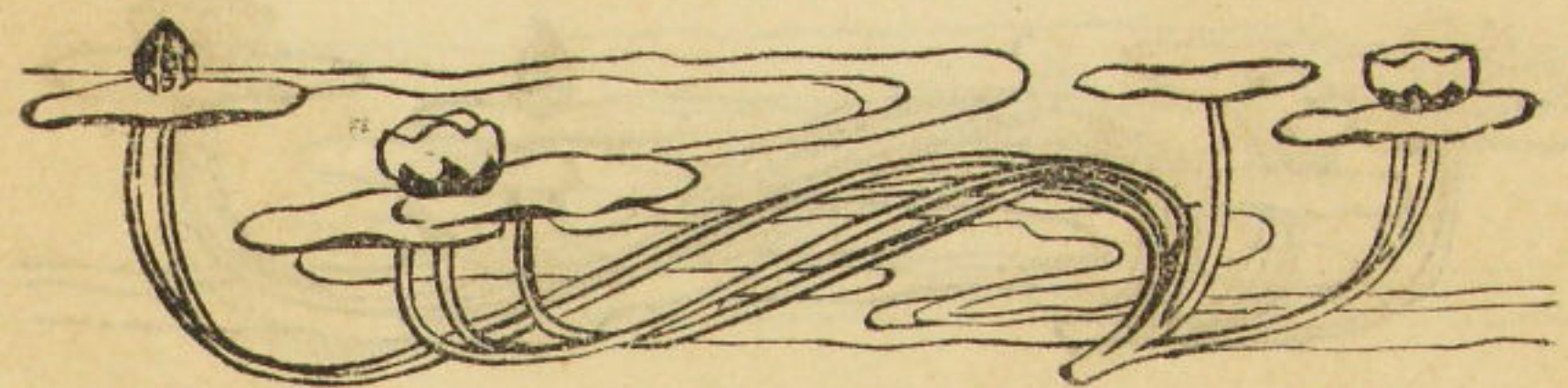
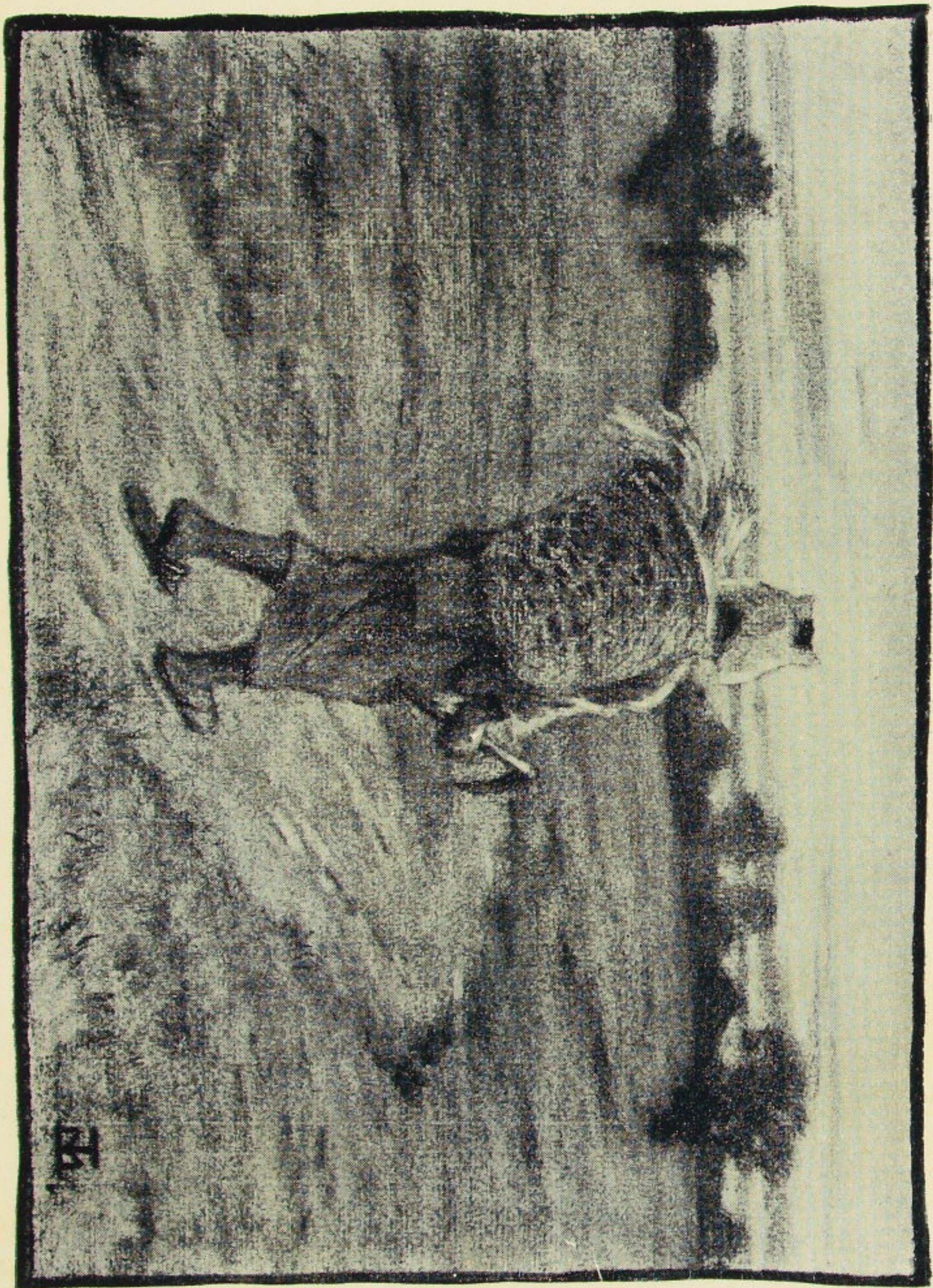


風を求めて 夏の夜も
月を眺めて 秋の夜も
流れも 清き 橋の上に
村の 若き 戀人の
晝の 疲れも 忘れつゝ
胸の まことを 語りたる
その 夜 ゆかしき 橋の上を

村の橋



葉末の露に はぐゝまる
月下の蟲に およばざる
少女は 琴を 投げやりつ
口をつぐみて 歌はざる
葉末の露に はぐゝまる
月下の蟲の音 さやかなり



長く 彼等は 渡るらん

飛ぶ 蝙蝠の 羽音さへ

渡らさぬ 心の 氣おくれて

橋の 袂の 小柳の

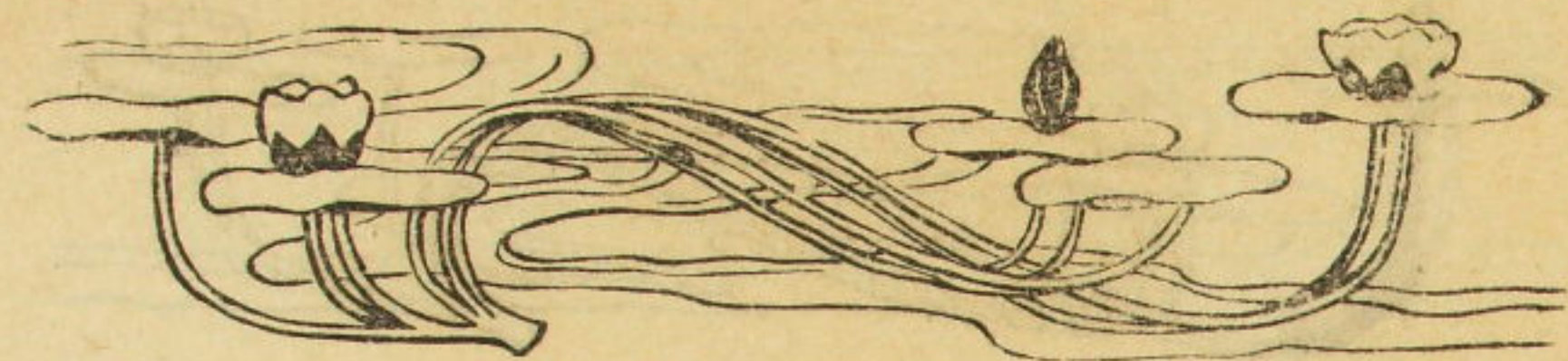
繁る 木蔭に 忍びたる

その 夜 思へば なつかしき

緑の 深き 葉がくれに

彼等の 秘密は 包まれつ

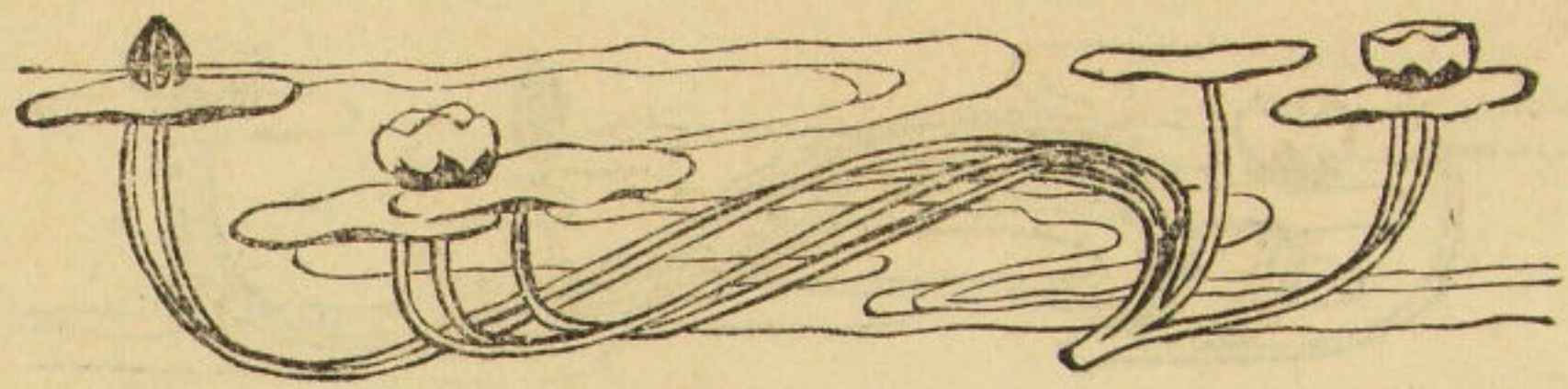
橋の 袂に 枯るゝまで



清き心

喜よろこぶも 樂たのしみも 安やすらかに
自し然ぜんの胸むねに 抱いだかる、
山やま また 山やまの 奥おく 深ふかき
こ、 山やま里さきの 歳としの 旦あけ

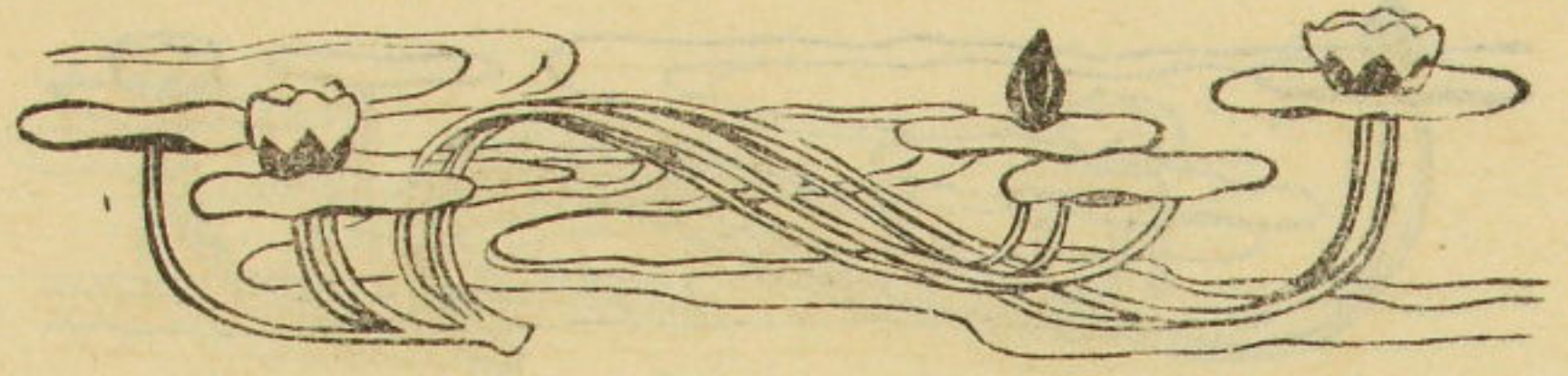
紫し雲うんは 峯みねに たなびきて
曙しよくわう光くわうは 村むらを 洗あらふとき



清き心こころに 神かみ 呼よびて
祈いのるは 風雨かぜあめの 穩おだやかを

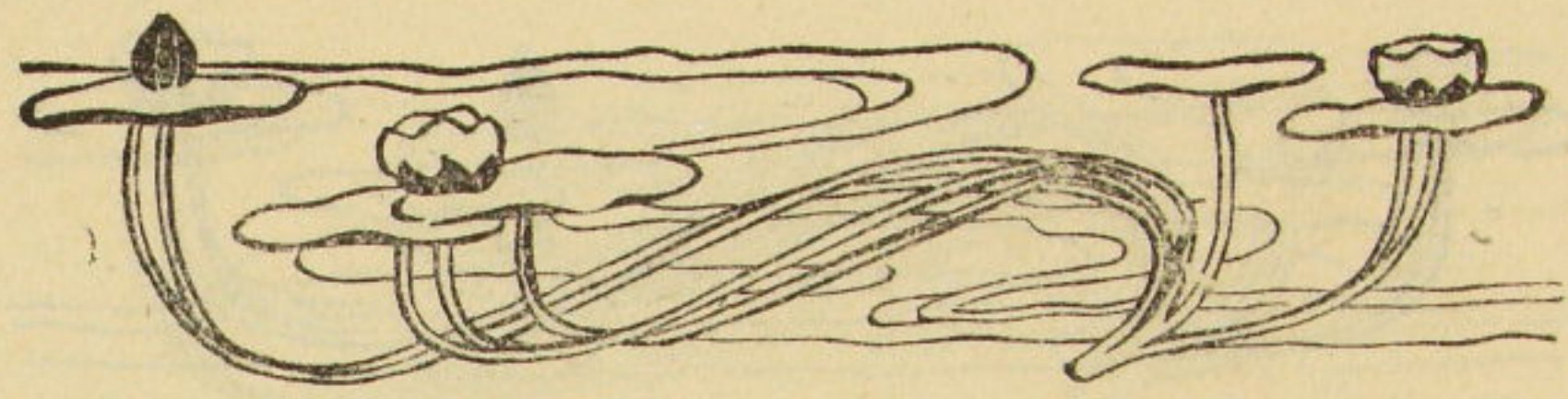
おのが作りし 米こめをもて
妻つまの醸かし、うま酒さけに
彼等かれらが 太平たいへい 謳うたふ聲こゑ
霞かすみに 入いりて 天てんに 昇のぼる

娘むすめは 手箱てはこに 藏かくめたる
花はなのかざしを とりだして



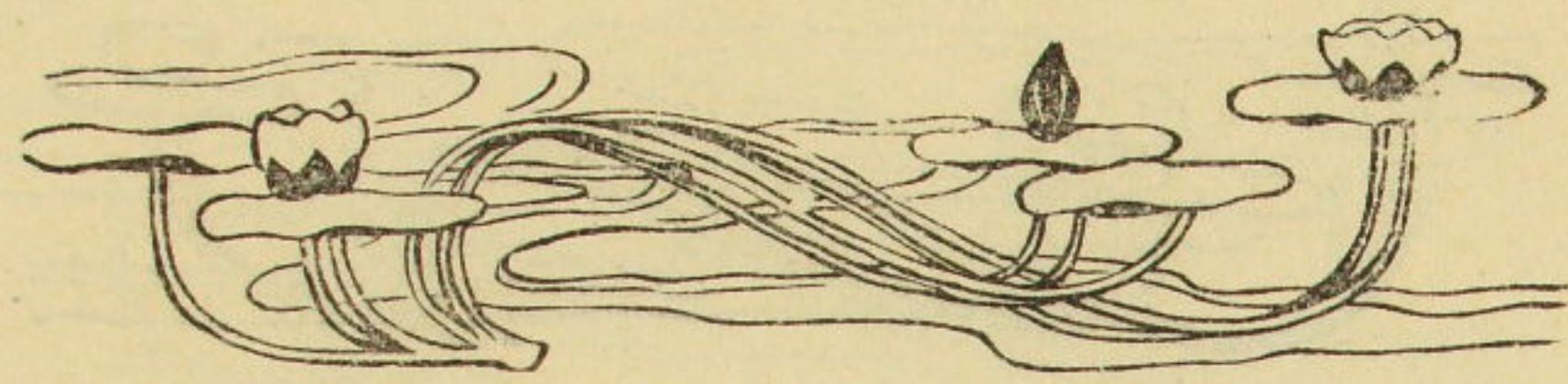
母ははのたばねし その髪かみに
歳としのはじめを 飾かぎるなり

四邊あたり 包つみし 雪ゆきの色いろ
里さとの彼等かれらの 心こころかな
雪ゆきの谷間たにまに 音おとあるは
自由じゆうの波なみの 源みなもとよ

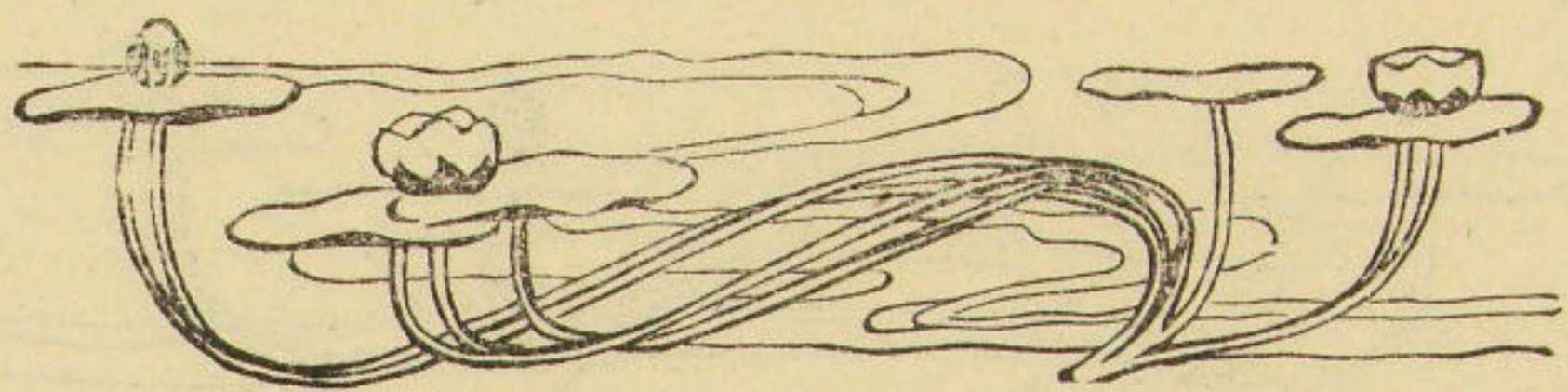


水かゞみ

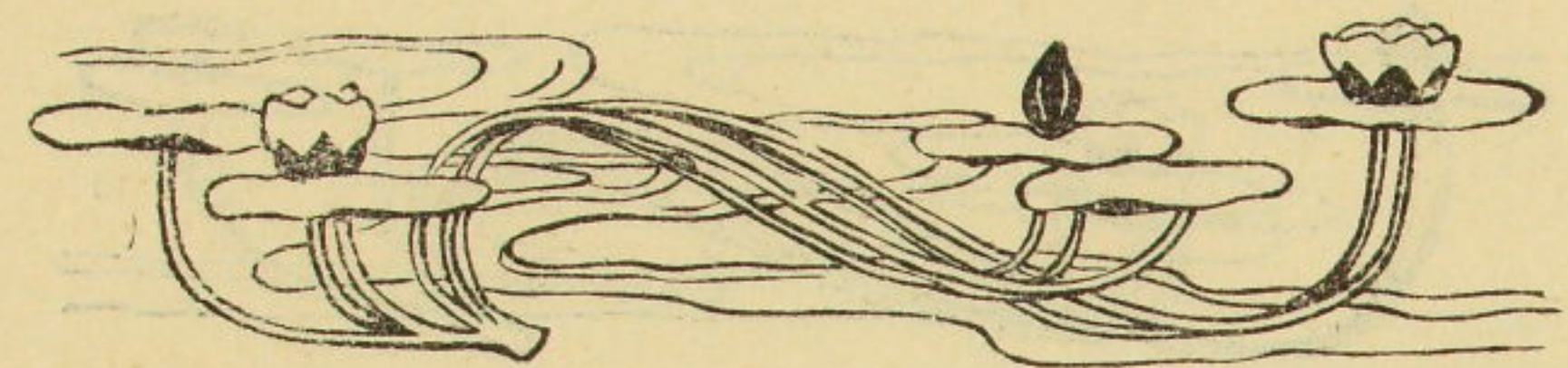
花山吹の 咲き垂るゝ
 裏の畑の 泉水の
 ちひさき岸に たゝずみて
 何に をとめは みるとるらん
 水面の花を 眺むるか
 おのが姿を 眺むるか



摘みし若菜も そのまゝに
 澄める水面に みるとれをる
 思ひの いつか 含まれて
 くれなる 頬に 燃えぬるを
 水 ひやさずに 偽らで
 そのまゝ 影に いろごりぬ
 双蝶 飛ぶや 花のうへ
 羽風に 匂ひ そよめけど

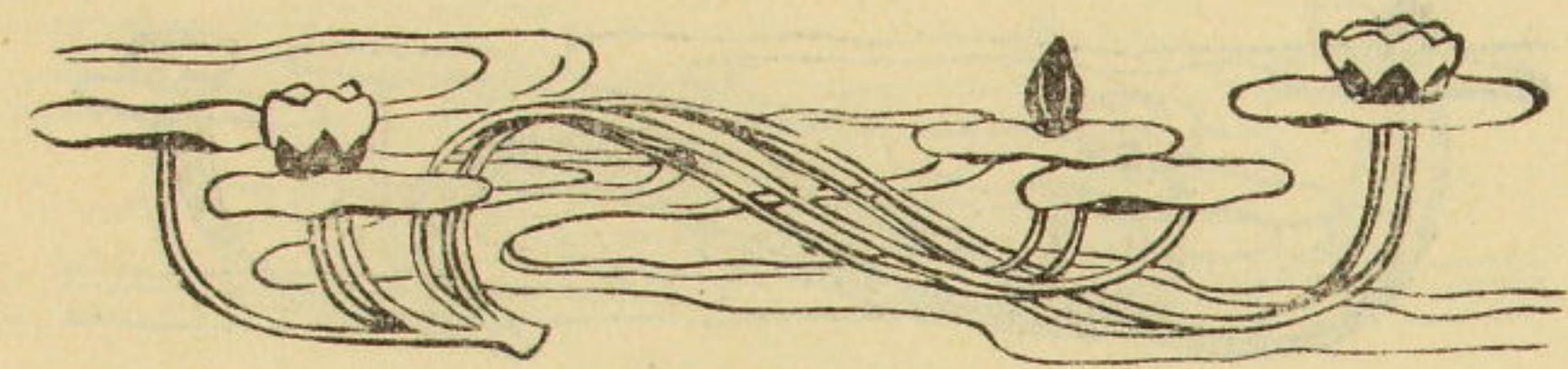


頬ほに燃もゆる くれなるは
 水みづよりほかに 洩もれざりき
 何なにに 思おもひの 燃もえぬるか
 おのが姿すがたに 羞はぢぬるか
 水みづに映うつれる くれなるを
 をとめは 人ひとに 語かたるまじ



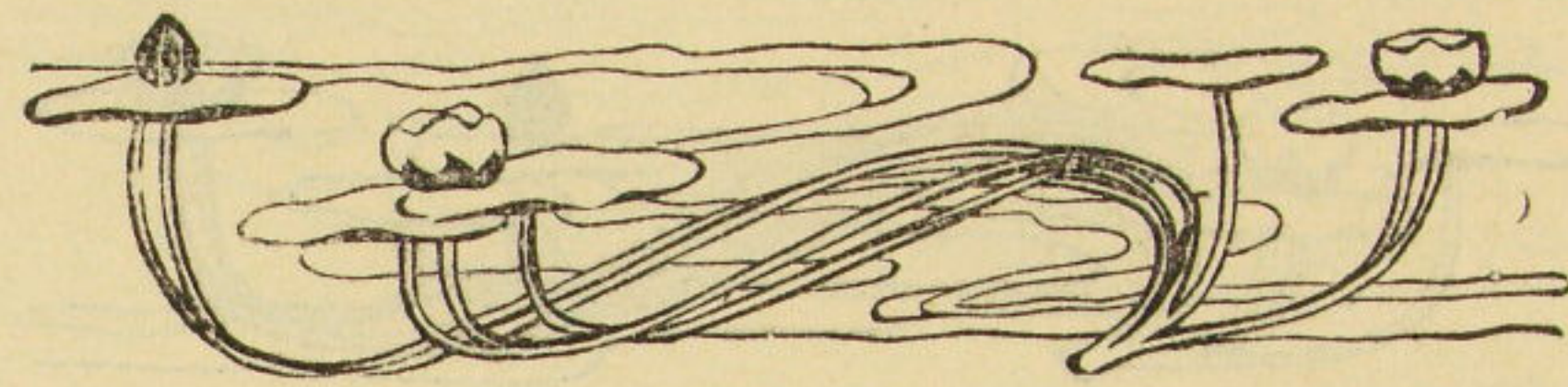
門の柳

門かどべに垂たる、 糸いと柳やなぎ
 今日けふは 昨日きのうに 色いろ 増まして
 降ふる雨あめ毎ごとに 青あおけれど
 姫おんなの袖そでの 裾あせしかな
 柳やなぎの糸いとは 染そむれども
 身みに降ふりかゝる 春はるの雨あめ

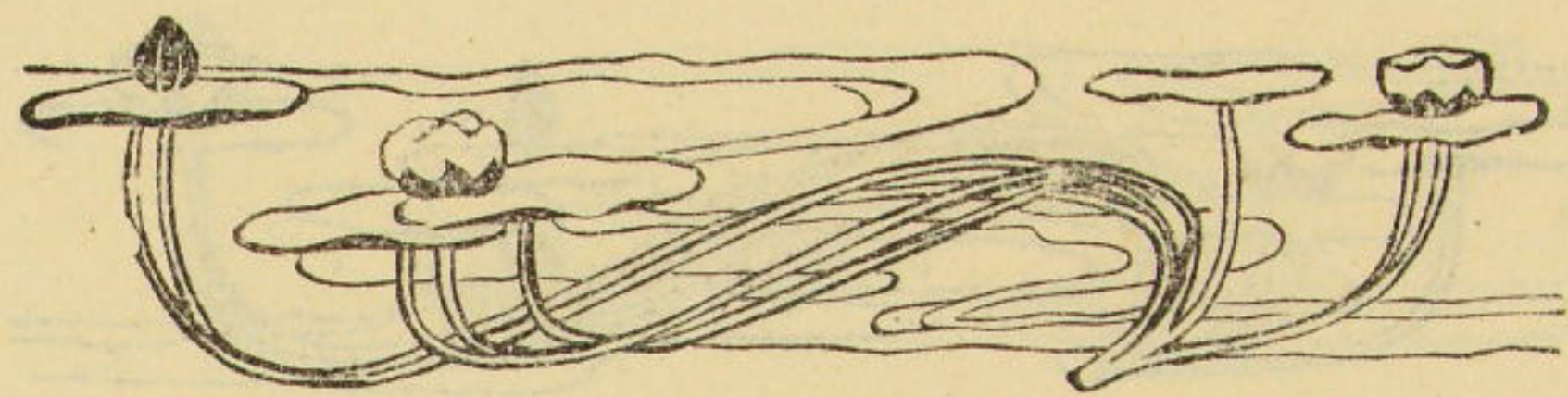


軒端のきはに巢すくふ 雀すずめらの
 囀さへつる聲こゑと もろとも
 朝目あさめまばゆう 起おきいで、
 今日けふの生業なりは 執とらんとき
 いづくを 我われの迷まよひしか
 にはかに 四邊あたり 影かげ 絶たえぬ

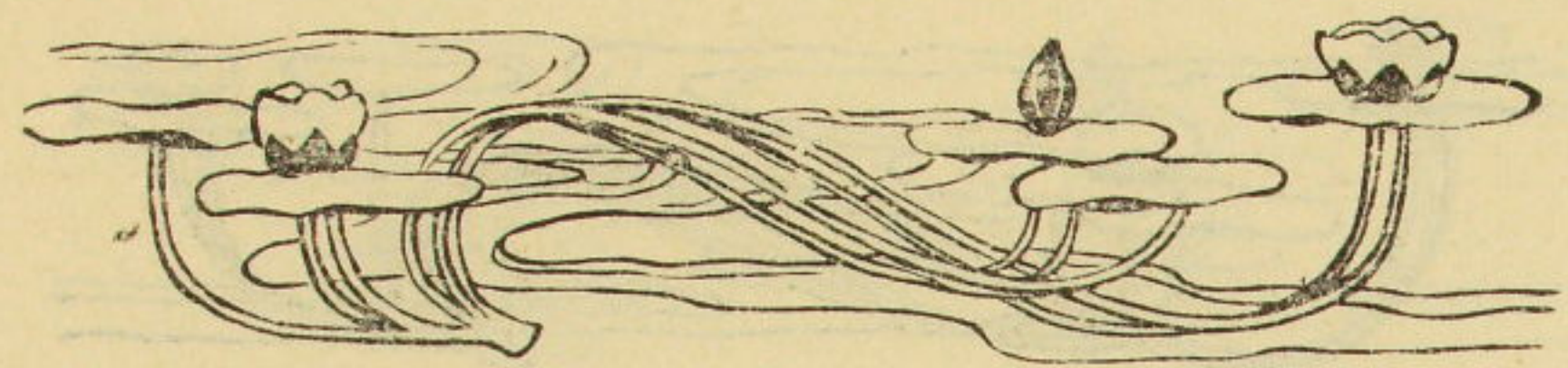
闇



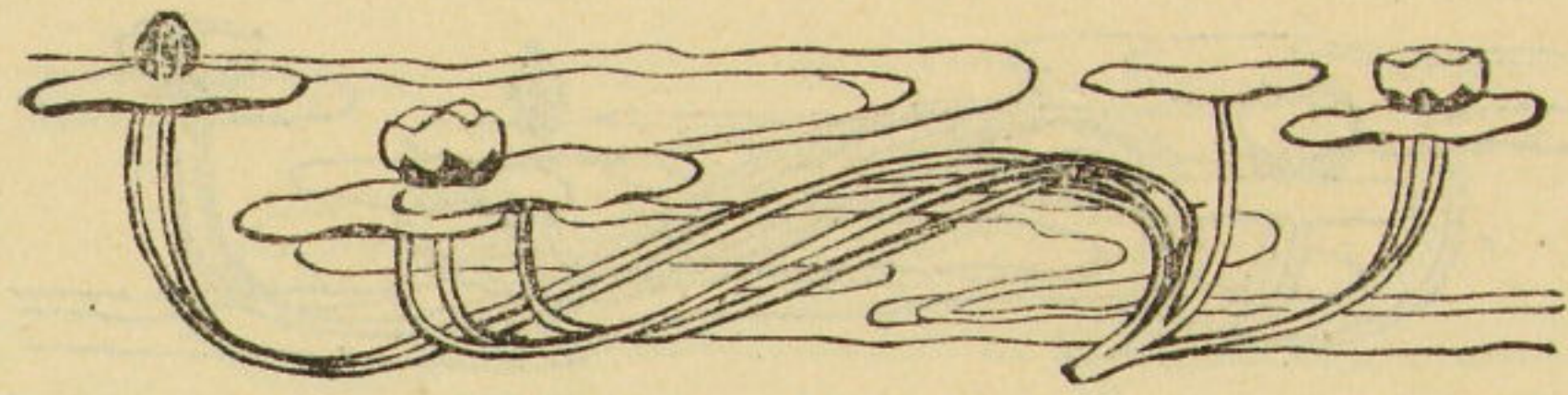
今年ことしは 去年こぞに いやまして
 翁おきなの髯ひげの 白しろきかな



見れども見えず 音もなく
 天地も分かぬ 闇の中
 取れど 掴めど 闇は徒
 踏めど 行けども 闇の底
 呼ぶも 叫ぶも 口のうち
 我 消えぬるか はた 闇か
 煌めく光り 遙かより
 ひとすぢ 細う 闇を射ぬ
 わなく 嬉し 迎らなん



光りは 次第に 縮み行き
 闇に迷へる 身は狂ひ
 急げば 急ぐまゝ 踏み迷ふ
 あゝ 我 などが 後れんと
 心 奮へば 身も進み
 慕ひつ 追ひつ 辿るうち
 いつしか 闇を はなれけん
 入日の燃ゆる 野のうへに
 晩鐘 徐かに 鳴りわたる



月もて

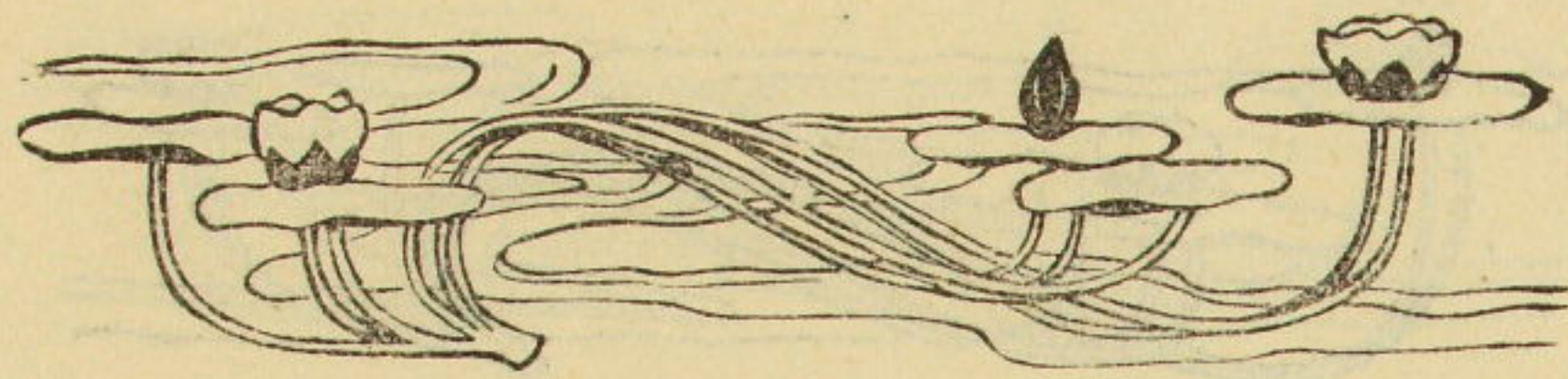
たとふれば

我は水なり 我は水

水静まれば 月圓か

水濁れば 月曇り

水浪うてば 月亂る



我は露なり 我は露

海にも 月の影 ひとつ

里の田毎に ひとつづゝ

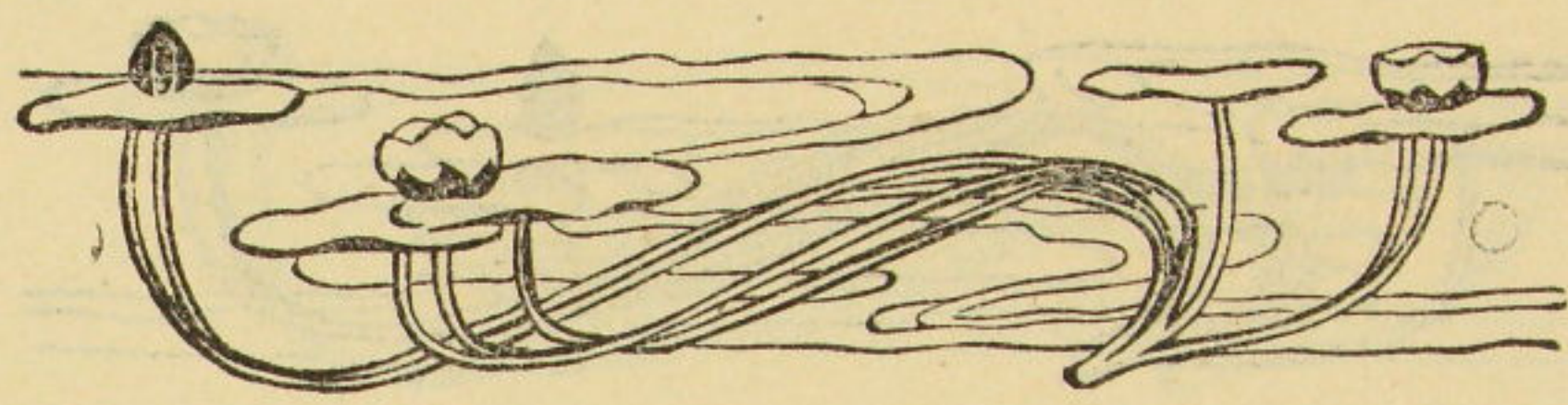
千草の露にも ひとつづゝ

我は森なり 我は森

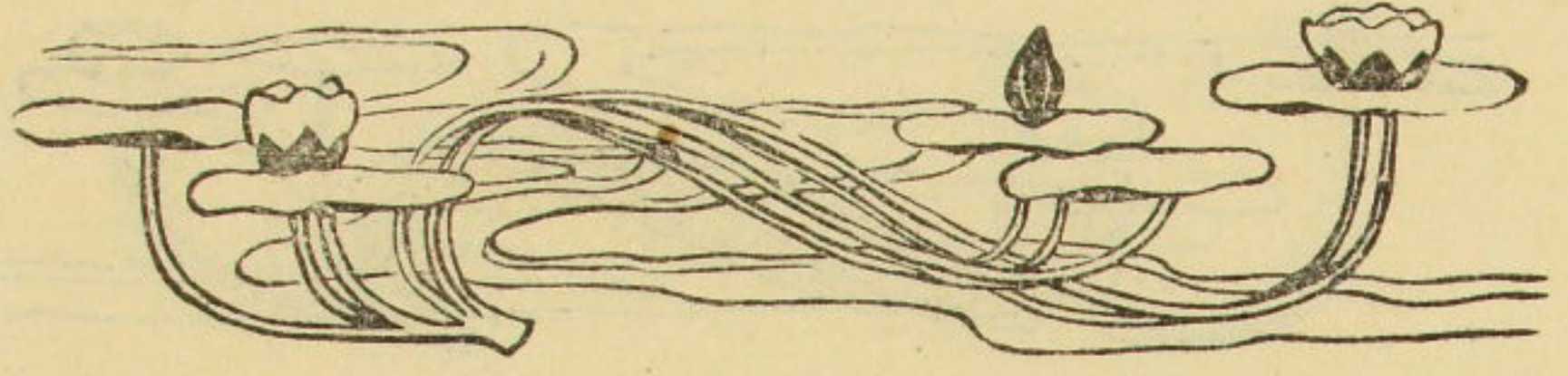
秘密は深き 森の中

誰知らじとや 思へども

木の間に洩るゝ 月の影

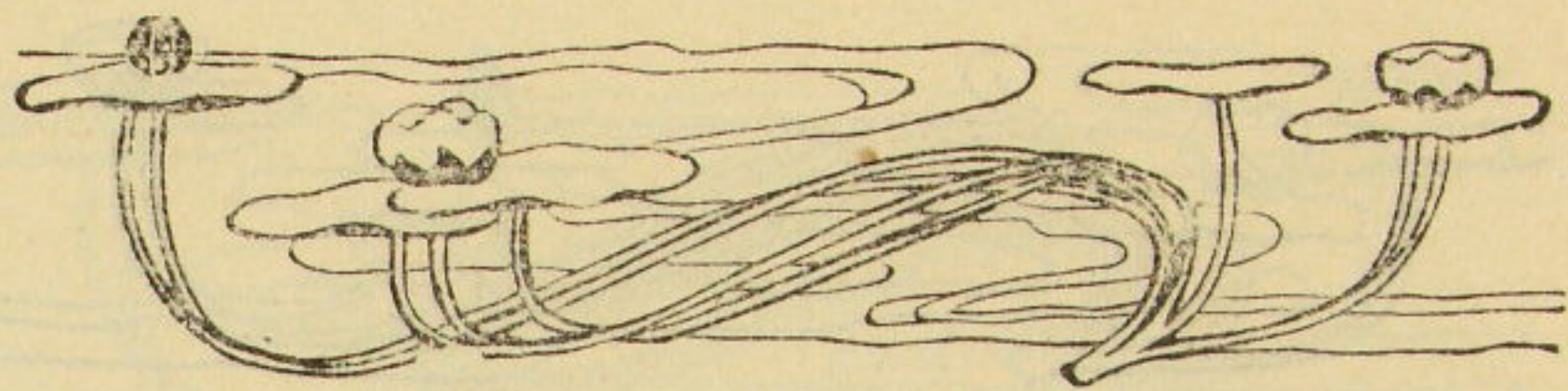


我^{われ}は闇^{やみ}なり 我^{われ}は闇^{やみ}
 月^{つき}を辿^たりて 行^ゆく路^{みち}の
 雲^{くも}間に 月^{つき}の 隠^{かく}るれば
 闇^{やみ}ゆる またも 踏^ふみ迷^{まよ}ふ



驛^{しゆく}の桶^{づく}屋^や

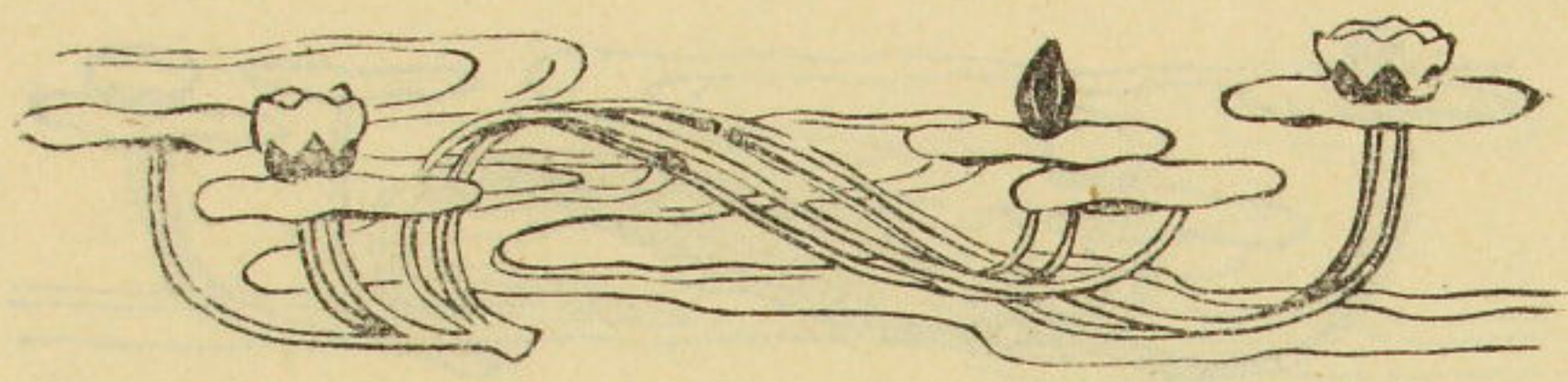
秋^{あき}の夕^{ゆふ}日^ひの 山^{やま}陰^{かげ}に
 隠^{かく}れて なほも 燃^もえのこる
 茜^{あかね}の 色^{いろ}の 空^{そら} さして
 いづく 行^ゆくらん 雁^{かり}の 群^{むら}れ
 鳴^なく 音^ねや あはれ 旅^{たび}人^{びと}の
 路^{みち} 急^{いそ}がする 驛^{しゆく}の 暮^{くれ}れ



驛のはづれの 桶屋の家
 桶には水を 洩さねど
 雨には洩るゝ 荒れ屋根の
 細き煙に 秋の風

二

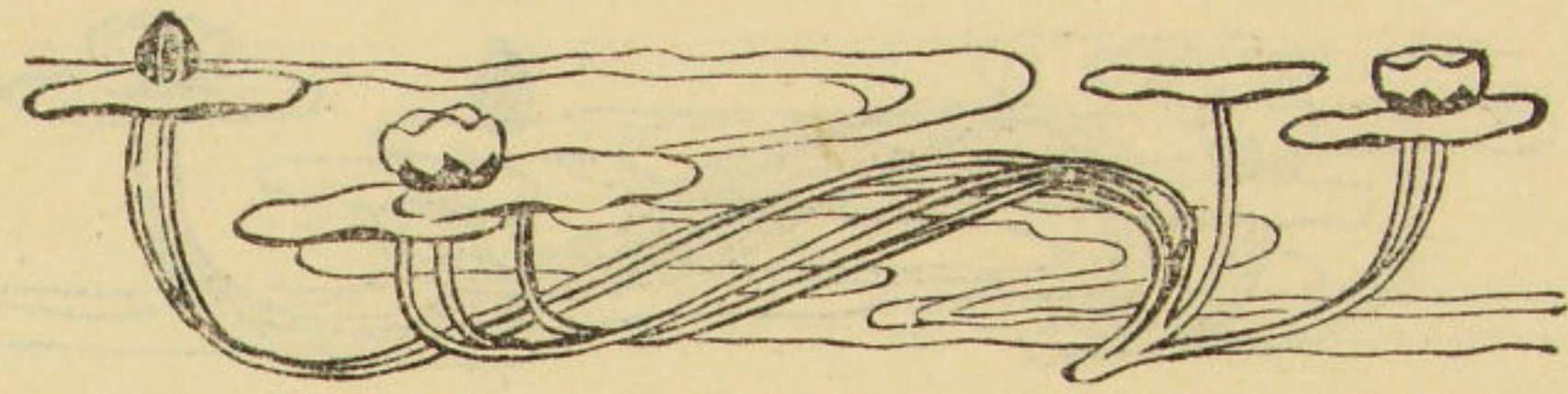
眠れる稚子を 背に負ひ
 衣の襟の 廣どりて
 窶れし胸に 風寒う
 追はるゝ日々の 侘しさに



縊輪編む手も 力なう
 背の我が子に あてじとて
 心遣ひの 手廻しに
 竹は 破れ窓 しばたゝき
 稚子は 眠りを 覺まされて
 背に泣く音の 哀れなる

三

坊やの母は あの里へ
 この山越して あの里へ

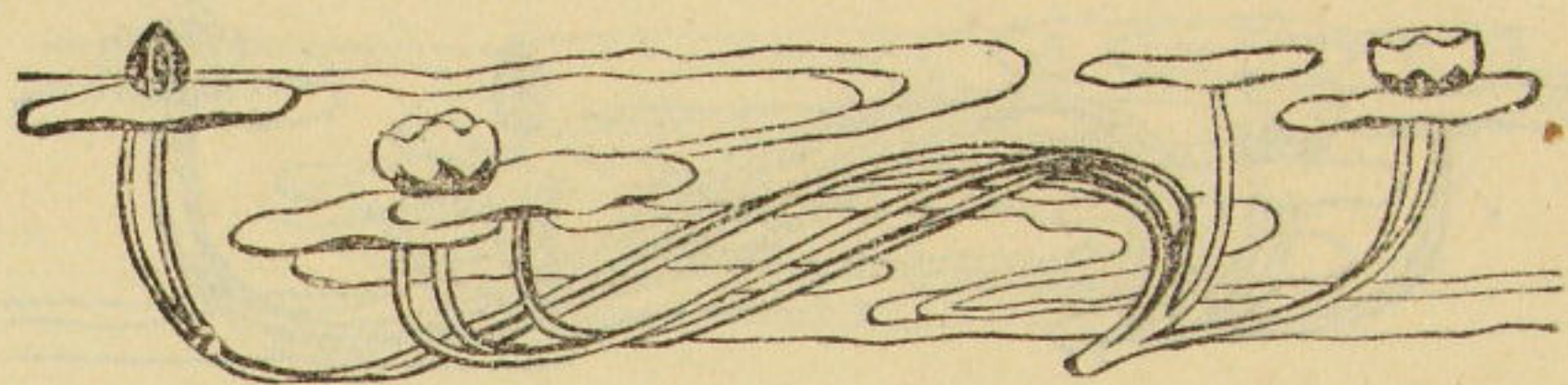


里は通はぬ 闇の空
 往つて戻らぬ 置土産
 香華のかげに 貫ひ乳
 おぼつかなさの 子守唄
 揺る背には いぢらしう
 ちひさき手をば 動かしつ
 探るが如き そのさまは
 乳房 尋ぬる こゝろかや

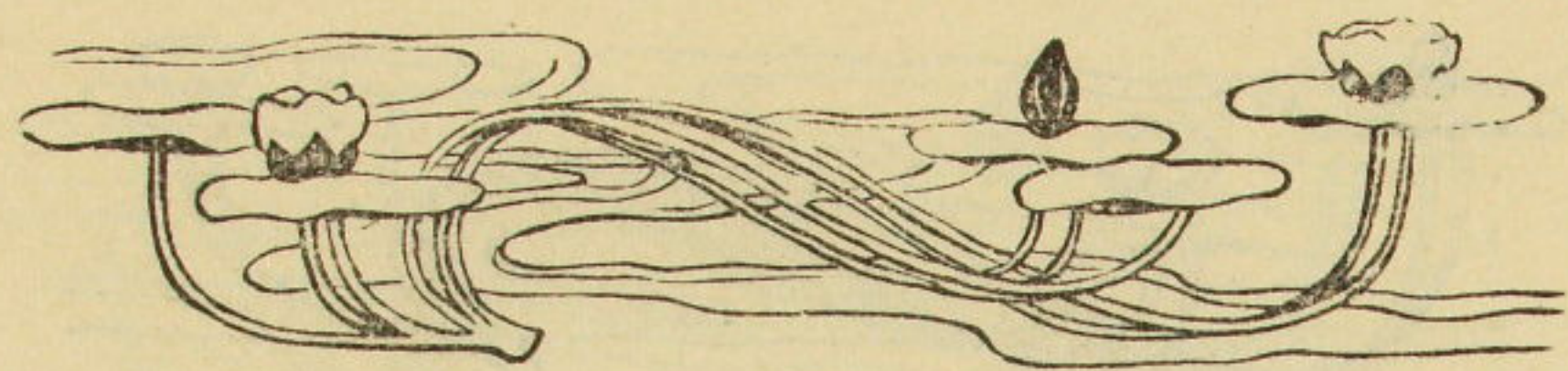
四



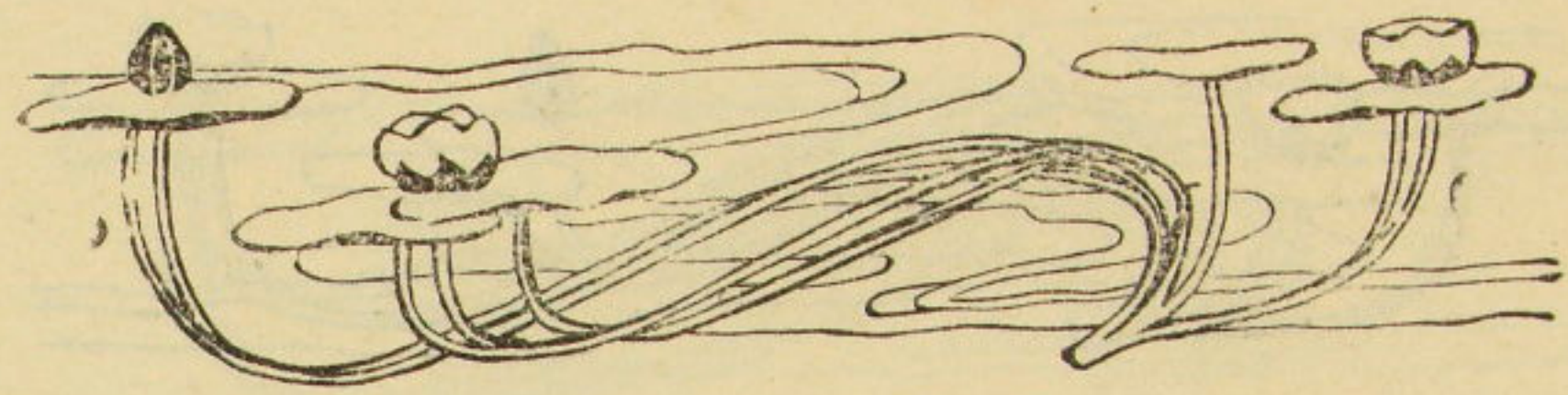
軒の桃 咲く 春の朝
 なが産聲を あげてより
 嬉し思ひも つかのまや
 春は暮れ行く 夕嵐
 散りぬる花と もろともに
 母と呼ぶるゝ 聲 聞か
 運命の衣 纏うては
 今 是た 影の 残るべき
 共に眺めし 桃の花
 行く年毎の 手向かな



かひなう 弱る 細き音の
 五
 止みては またも すやくと
 夢のうちにはや 母を見らる
 微かながらも 頬の笑み
 笑めども あはれ その頬に
 接吻らん母や 黄泉の人
 桶の箍より 身の箍に
 いたくも ひとり 締められて

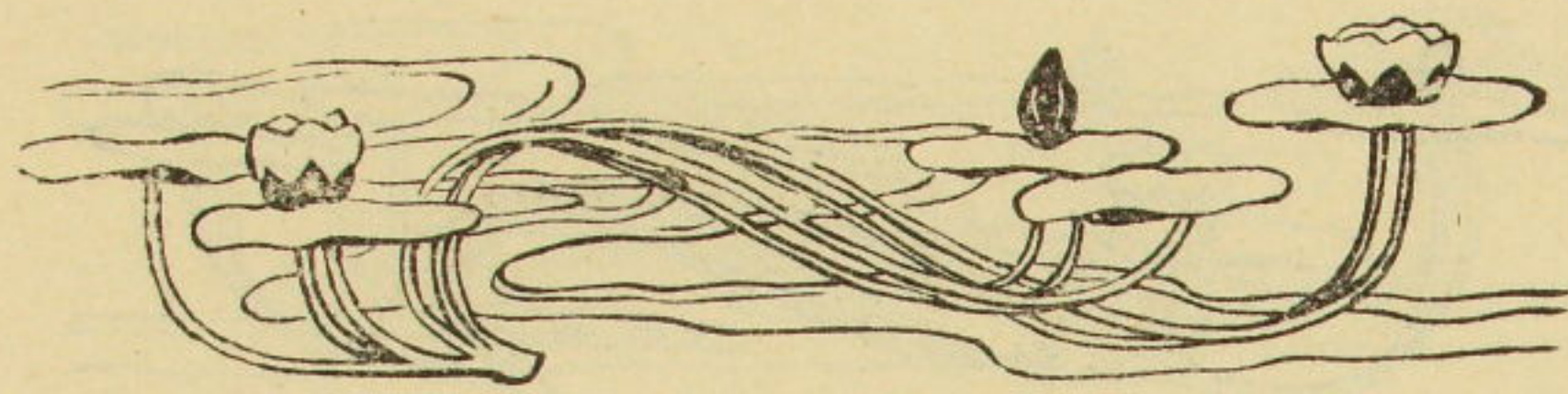


涙の落つる 膝のうへ
 ひかげ 日影は去りて 窓 暗し



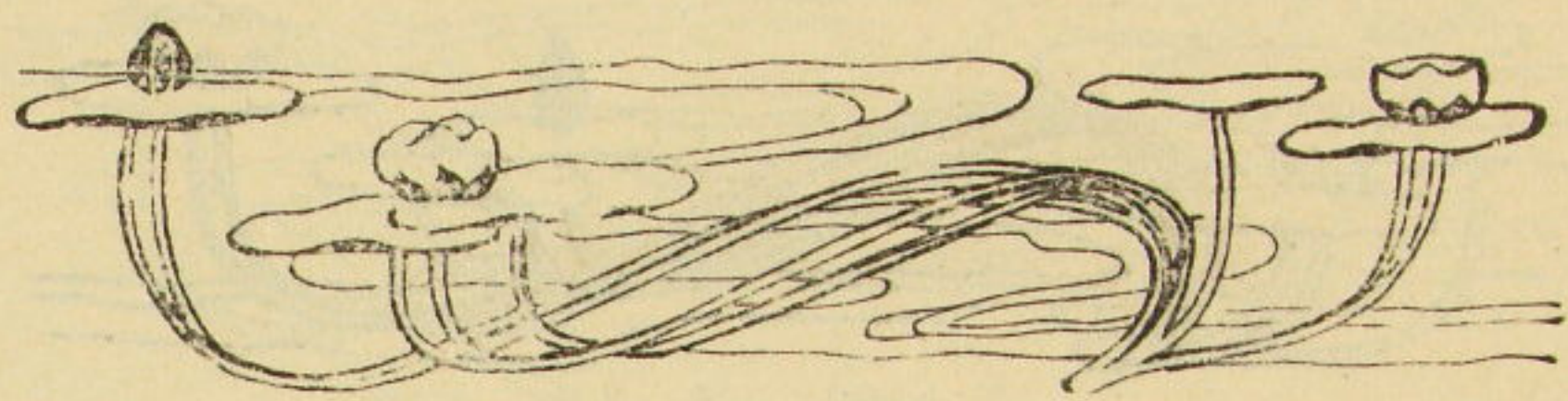
二つ道

その口に
道を説くふり賢くも
心は迷ふ二つ道
飛んでは戻る我が闇の
耻づかしいではないかいな

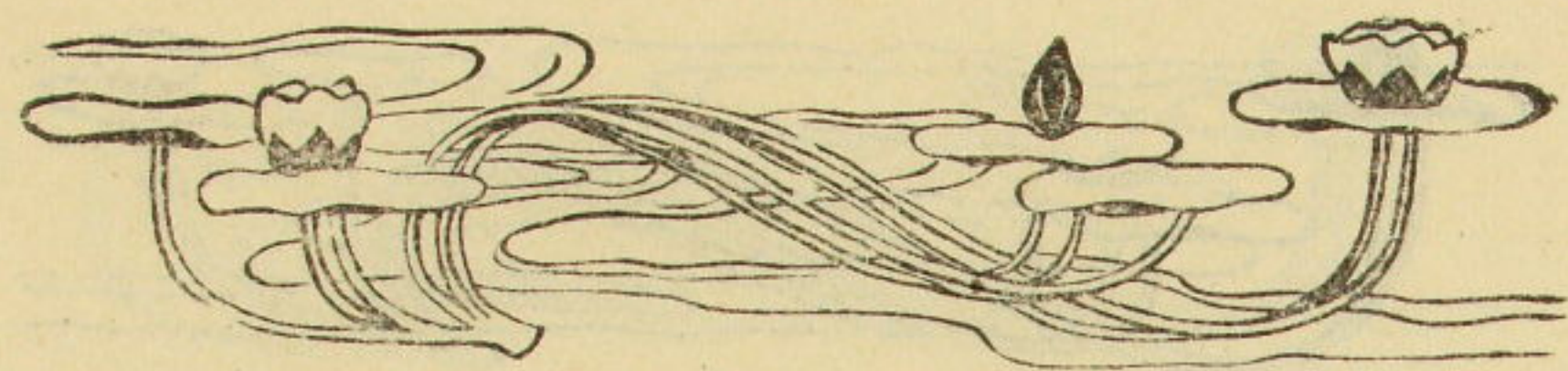


うぐひす

霜さへ解くる春雨に
濡れて綻ぶ梅が香を
慕うて鳴くやうぐひすの
初音ゆかしき春の朝
我も解きたいこの胸の
結んで固き我が思ひ
濡れて解けたや開きたや

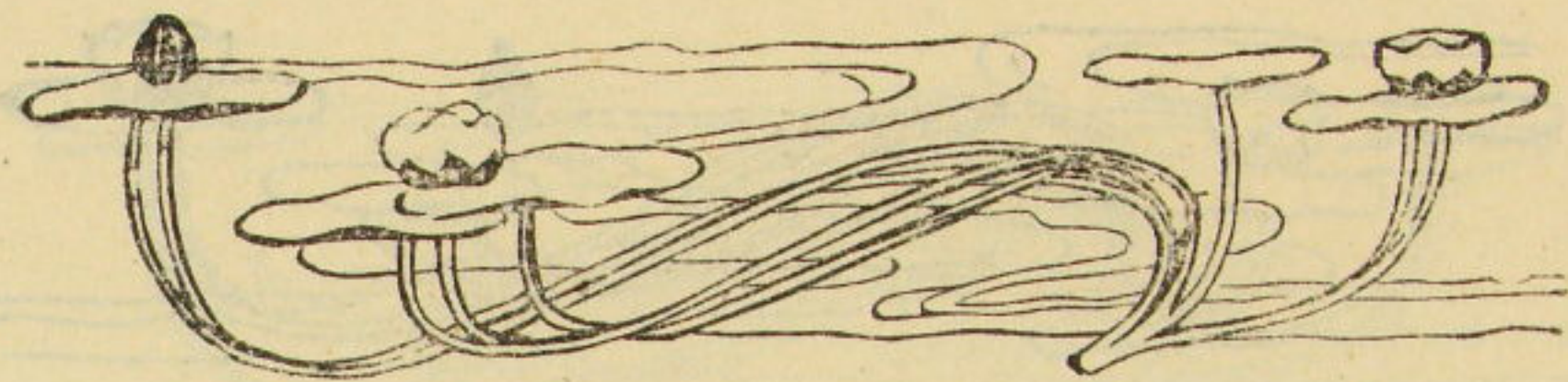


開かば 慕ふ うぐひすの
 こゝにも 飛んで くるわいな



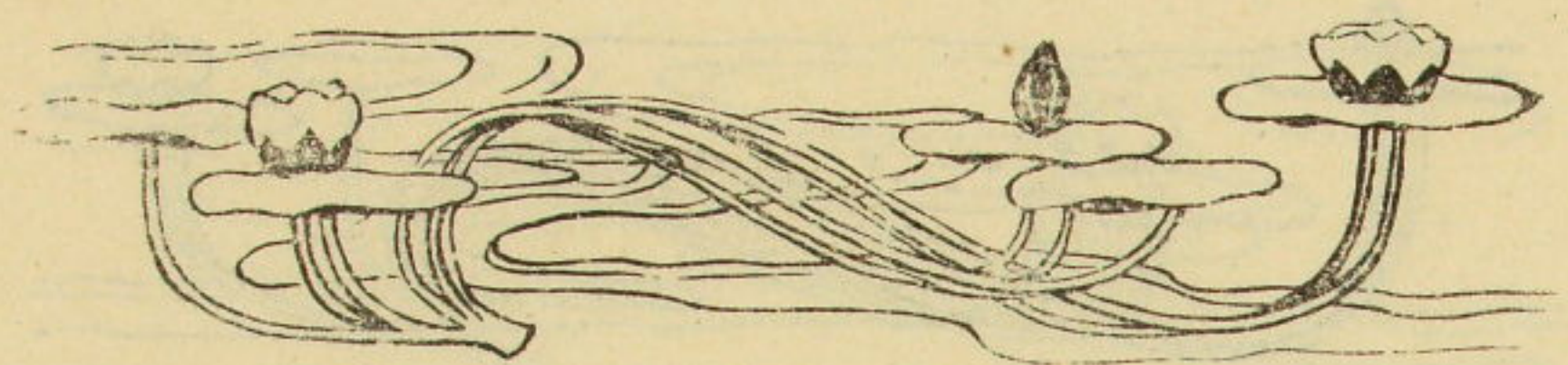
濁り江

藻の花 咲くや 濁り江の
 水底 知らねば 浅深さ
 波をば 揺る 風にくる
 そよの 匂ひに さそはれて
 花を 摘まんと 江に入れば
 一足 浅く 二足と



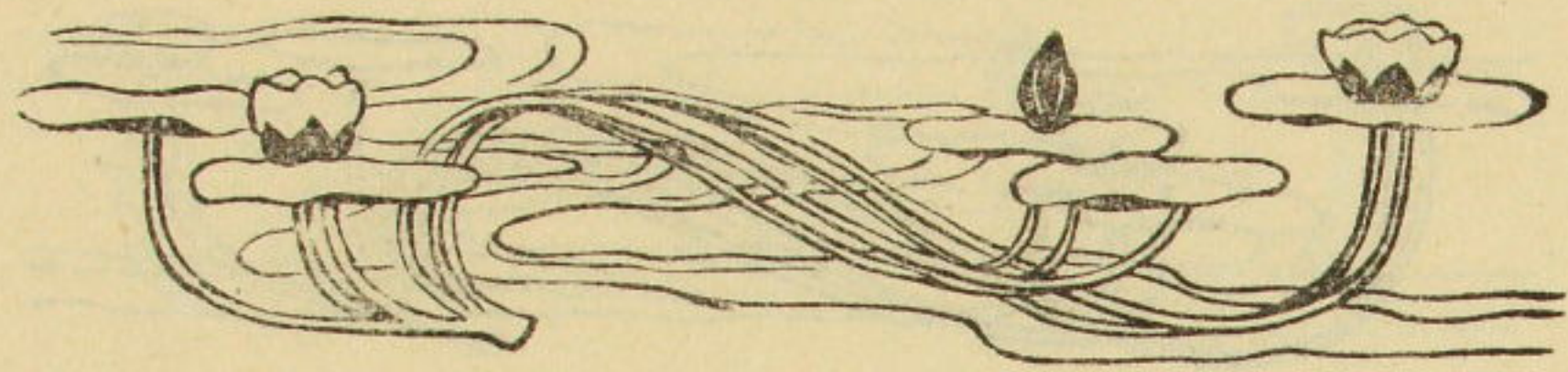
三足 四足と 泥 重く
 深まる 足を 抜くまもなう
 波に 浮べる 藻の花は
 あれ 風に 吹かれ行く

二
 水底を 踏めば 泥 深く
 足を 上げんに 泥 重く
 句ひは 近う 手の さきに
 摘まんと 伸べし 藻の花は



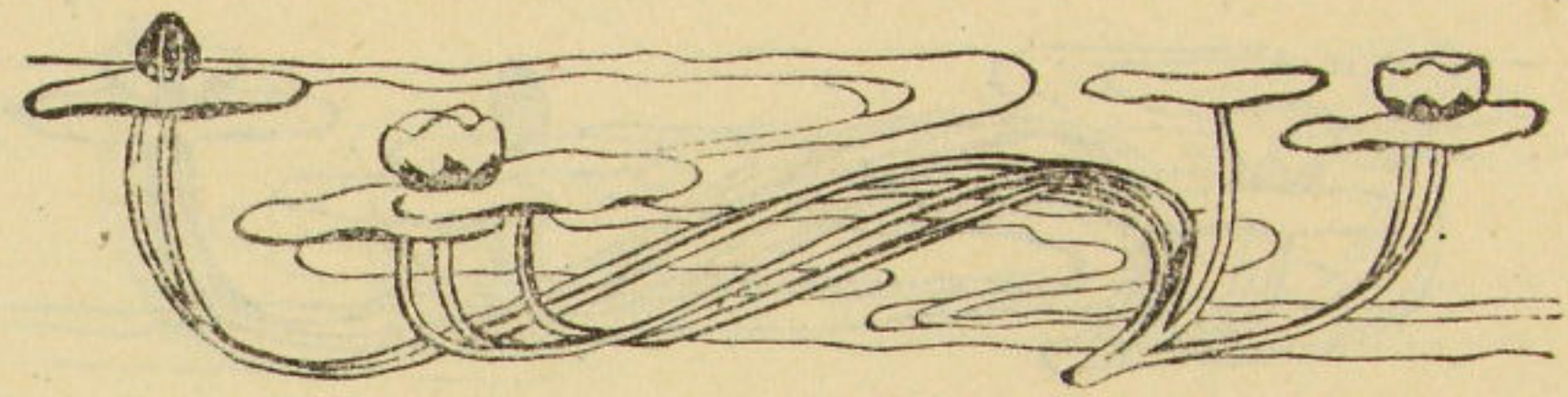
風のまに 風 追へど
 そよくる 句ひの 後
 花は 我が手に 摘まれざる
 またも 寄りくる 風にくる
 それよ 摘まんの ひと漕ぎに
 こは 知らざりし 泥の淵

三
 今は 仇なれ 藻の花は
 影も 句ひも どこへやら

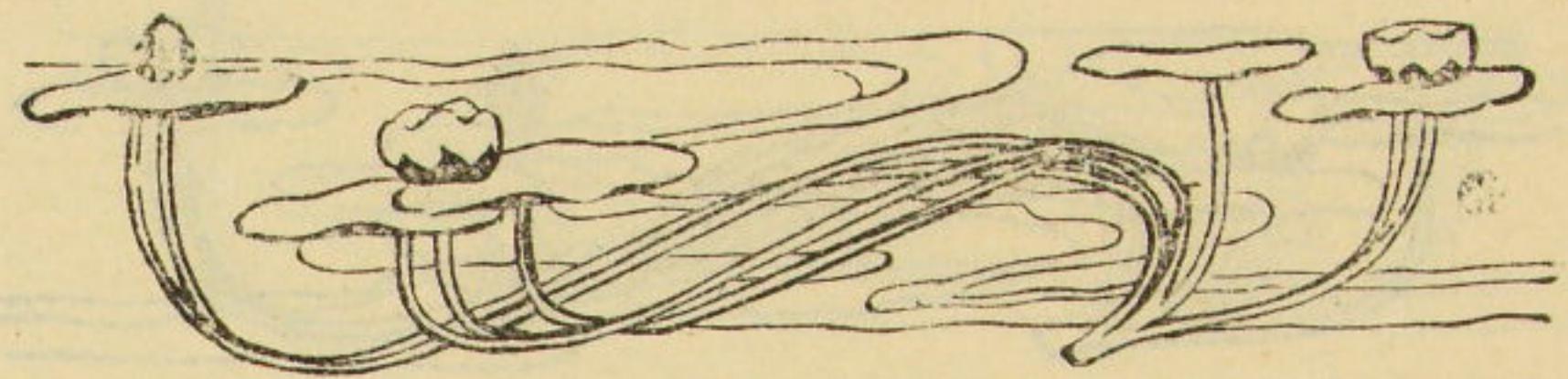


半輪の月 高く照る
 秋の山里 夜更けて
 いづくの里に 下るらん
 一群れ 過ぎし 雁の音も
 聞くや 聞かずや 里人の
 枕の上を 迎る夢

小きむくろ



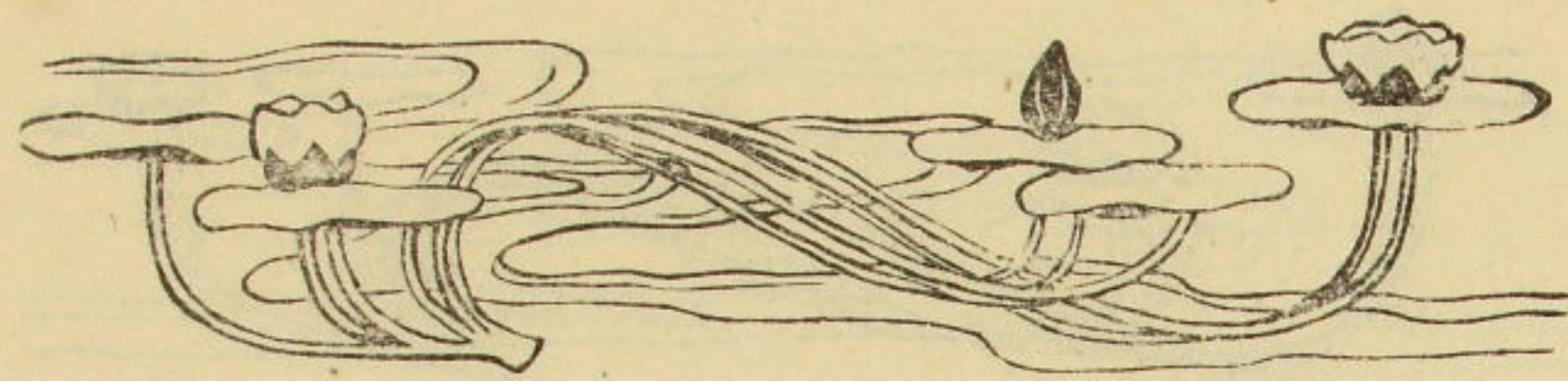
岸を離れて 寄るべなう
 浮きつ 沈みつ 漂ひつ
 腕けば 水の 潑ねるのみ
 はかなう 消ゆる うたかたと
 危く 溺る 時しあれ
 いづく 妙なる 聲のして
 優しき小鳥 飛び下りぬ
 乗れば 嬉しや 岸のうへ



たゞ 颯々の 風 寂びて
 人の 夢路に 通ふかな

二

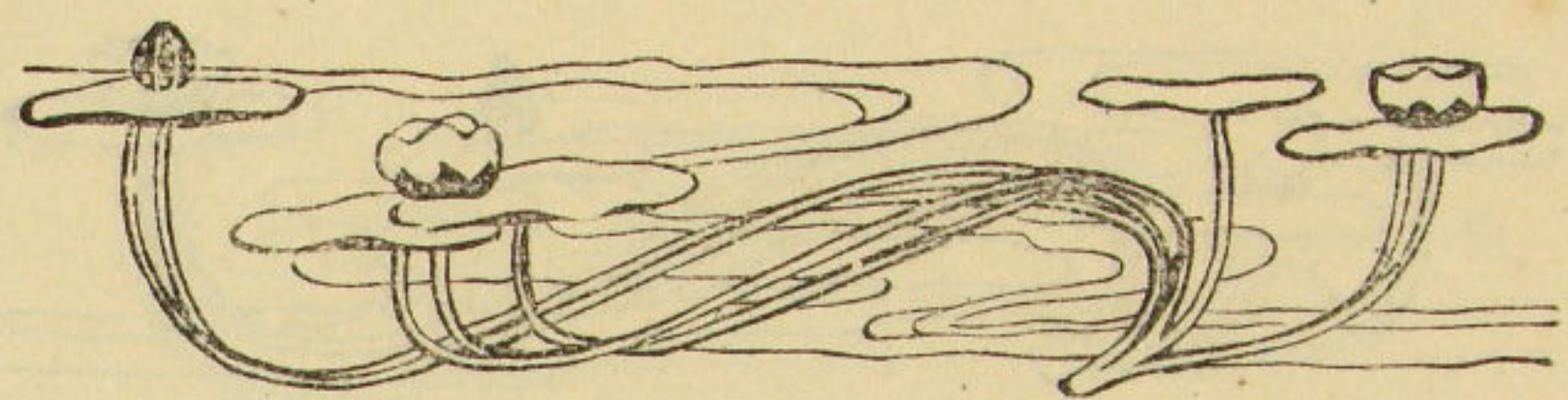
通はん 路の 跡 絶えし
 傾く 軒に 草 そよぐ
 破れ 窓 洩る、 月影に
 ちひさき 骸 こゝにあり
 をさなき 聲の 叫びにて
 おゝ 苦し おゝ 苦し



たゞ 聲のみぞ 風のまに
 哀れに 高う 聞こえけり

三

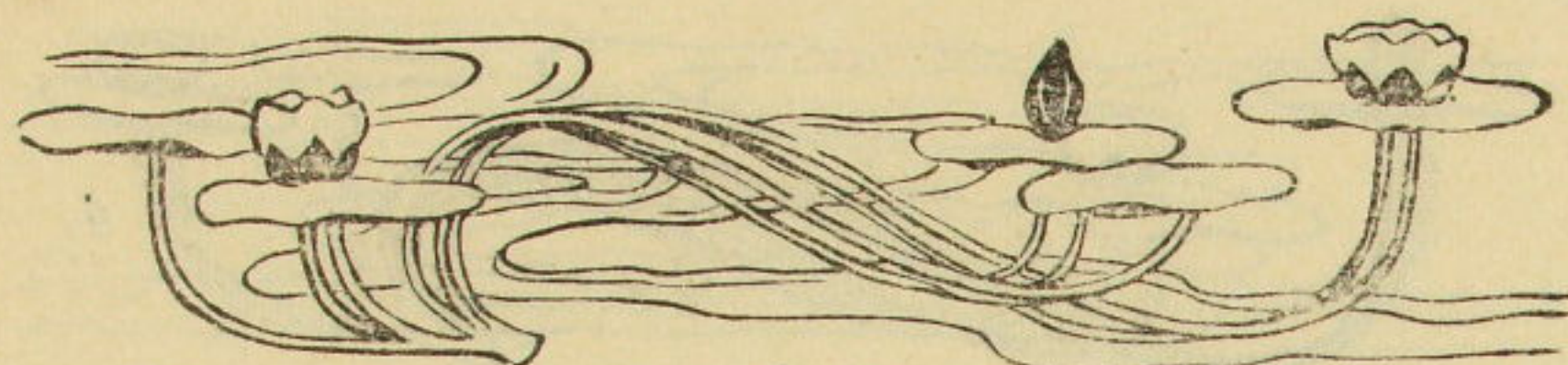
露と 消え 草と 枯る
 留めえぬ 命 せひなくも
 世の 吊ひに 疎まれて
 月は 愁へて 風は 悲む
 をさなき 聲の 叫びにて
 おゝ 苦し おゝ 苦し



たゞ 聲のみぞ 風のまに
 哀れに 凄う 聞こえけり

四

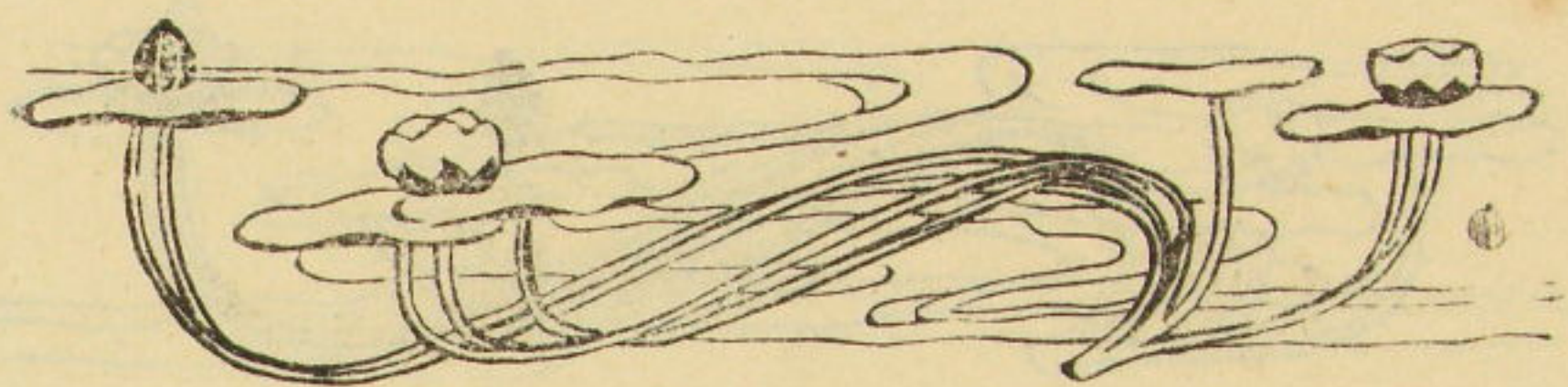
若き夫婦に 童ひとり
 春 あたゝかに 送りしが
 父は 過ぎつる 戦に
 兵に徴されて 畑荒れぬ
 をさなき聲の 叫びにて
 おゝ 苦し おゝ 苦し



たゞ 聲のみぞ 風のまに
 哀れに 凄う 聞こえけり

五

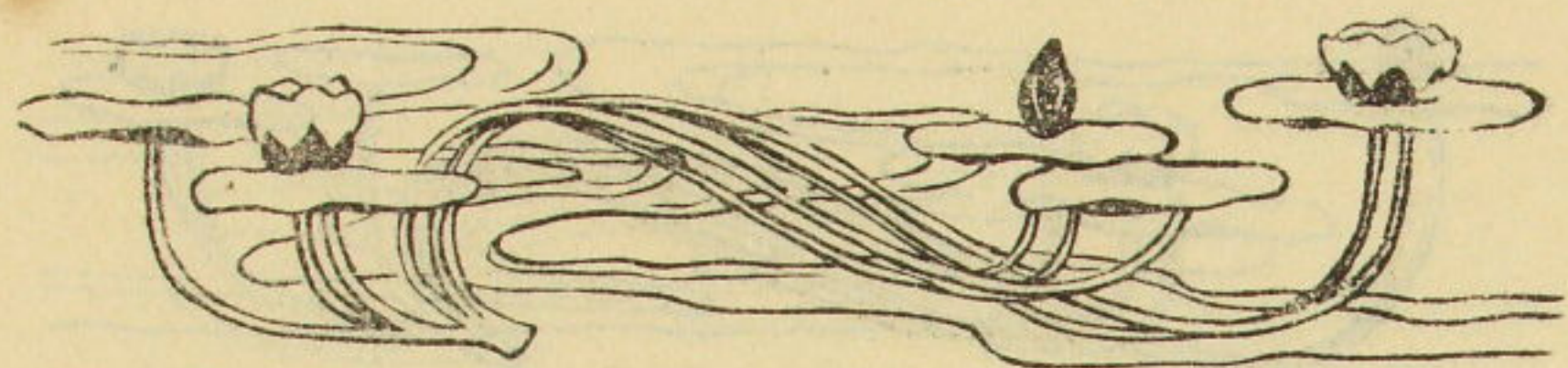
待てども 父は 歸らざる
 母は 嘆きに 氣の狂ひ
 或る日 野中を かけ廻り
 そのまゝ 見えず 日は立ちぬ
 をさなき聲の 叫びにて
 おゝ 苦し おゝ 苦し



たゞ 聲のみぞ 風のまに
 哀れに 悲しう 聞こえけり

六

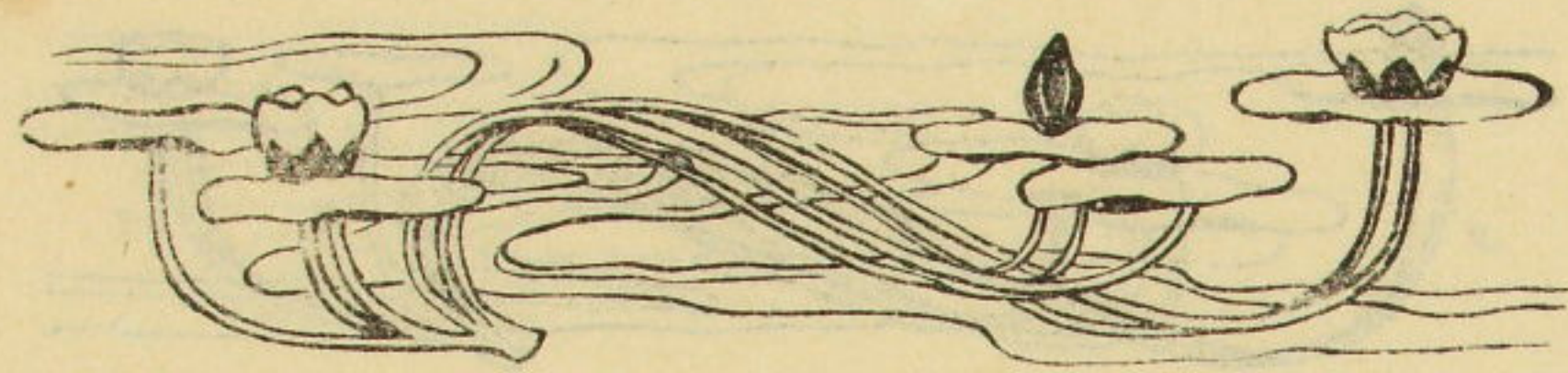
残るは 童ひとりにて
 泣くや 喚くや その聲の
 誰も訪ひこぬ あばら屋に
 いつしか 絶えて 草 深し
 をさなき 聲の 叫びにて
 おゝ 苦し おゝ 苦し



たゞ 聲のみぞ 風のまに
 哀れに 細う 聞こえけり

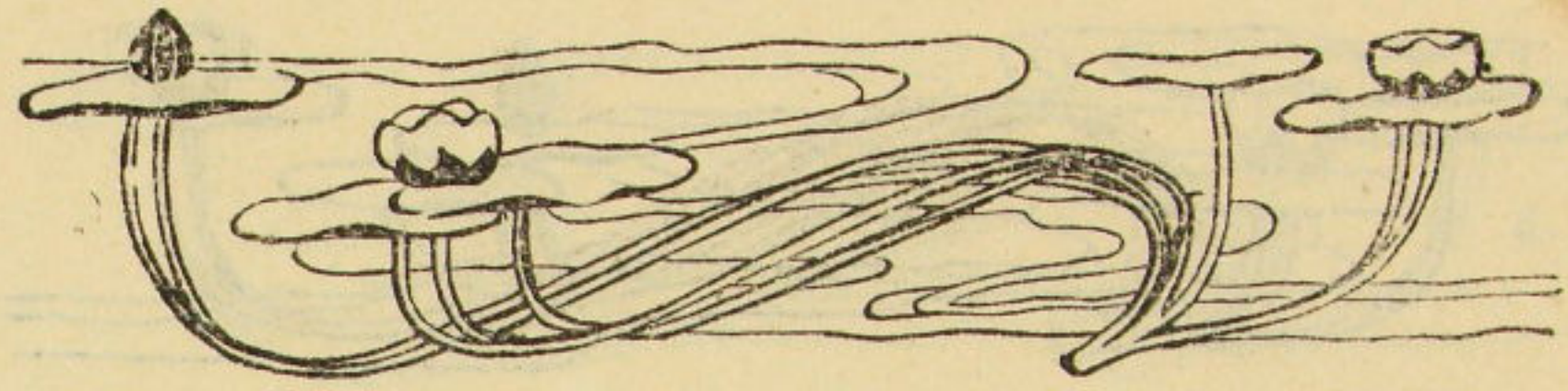
七

この時 雲は 月を掩ひ
 腥風一陣 軒に來て
 内なる聲の はたと止み
 聞くは そよげる 草の音
 聲か あらぬか 哀れげに
 いと 幽けく 聞こえしが

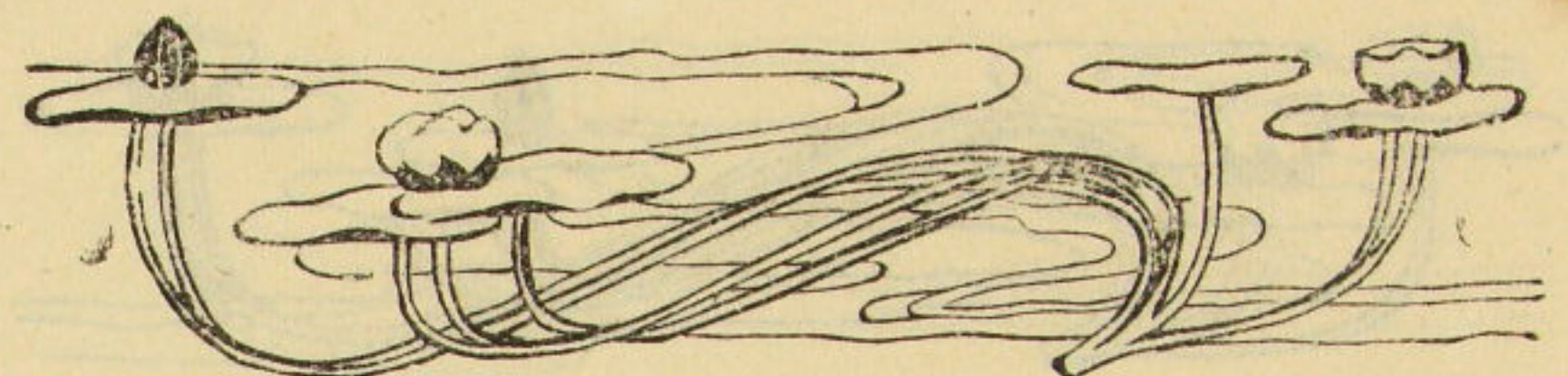


闇は深き 眞夜中に
 雨は瀟々たる音 淋し
 月の光りも 窓になく
 闇に包まる 床の内
 不穩の胸を おさへつゝ
 千々の思ひに 感ふをり

闇の聲

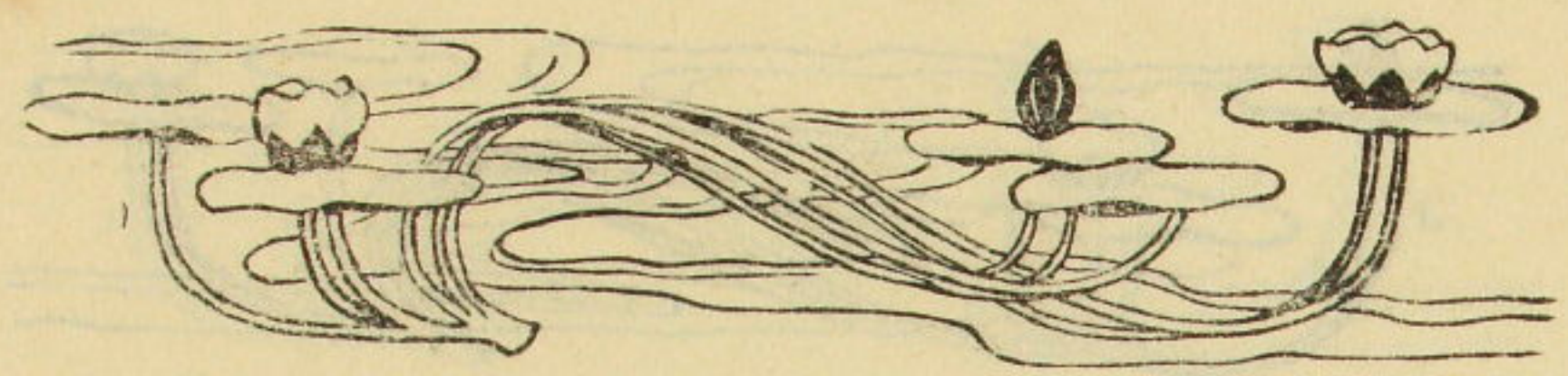


たちまち雲は 過ぎ行きて
 半輪の月 高く 照る

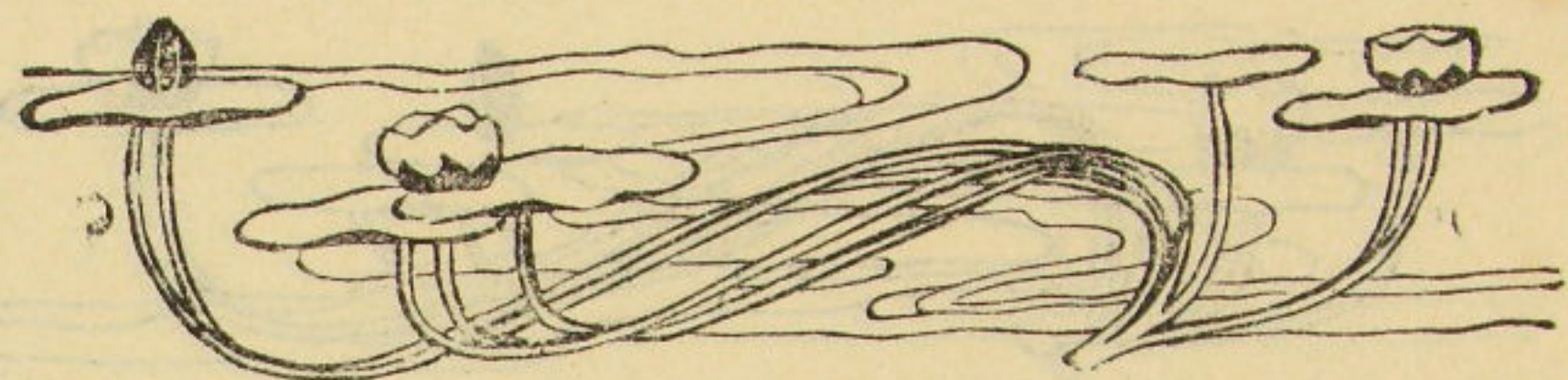


闇の中なかにに 聲こゑありて
 まさしく 我われを 呼よばれり
 いぶかしと 耳みみ そばだつれば
 雨あめ 瀟々せうせうの 音おとのほか
 室むろは 闇やみなり 聲こゑもなし

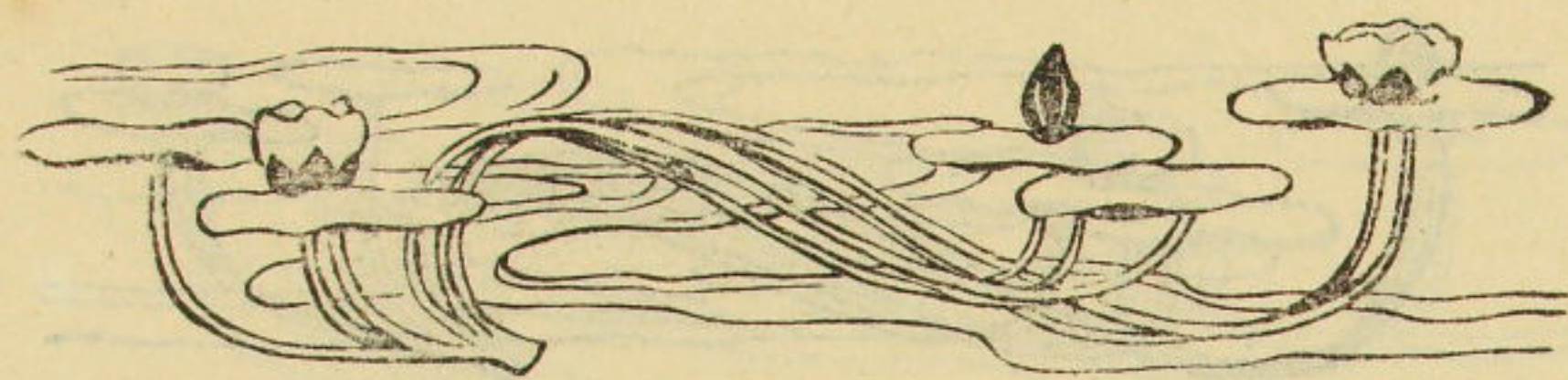
雨あめは 次第しだいに 降ふりしきり
 宵よひに 聞きこえし 蟲むしの音おとも
 灑そぐ急きふ雨うに 奪うばはれて



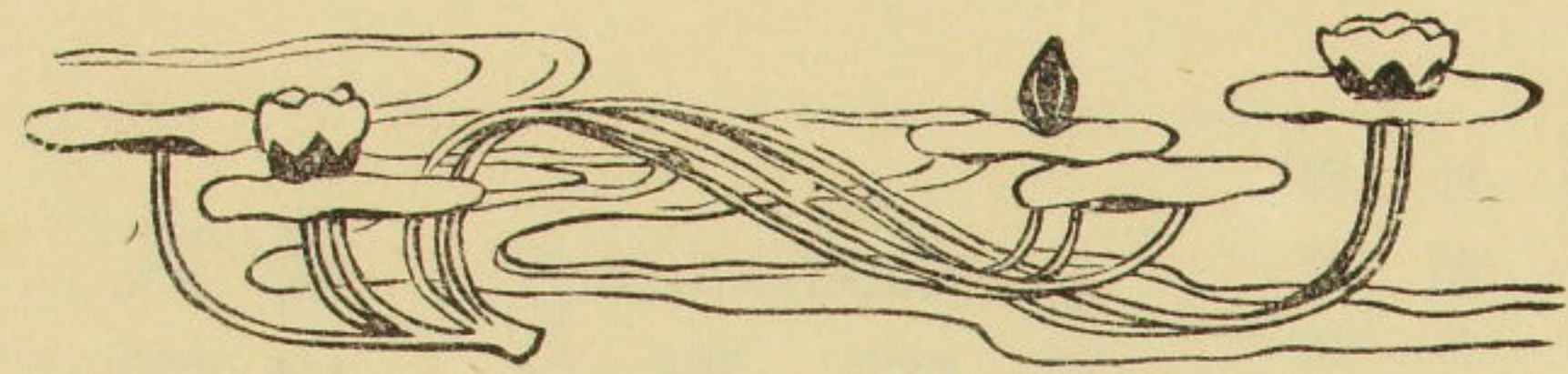
雨あめ 囂々がうがうの 音おと 凄さびし
 不ふ穩をんの 胸むねを おさへつゝ
 千々ちぢの 思おもひに 惑まどふをり
 闇やみの中なかにに 聲こゑありて
 高たかくも 我われを 呼よばれり
 怪あやしと 頭かうべも たぐれば
 雨あめ 囂々がうがうの 音おとのほか
 室むろは 闇やみなり 聲こゑもなし



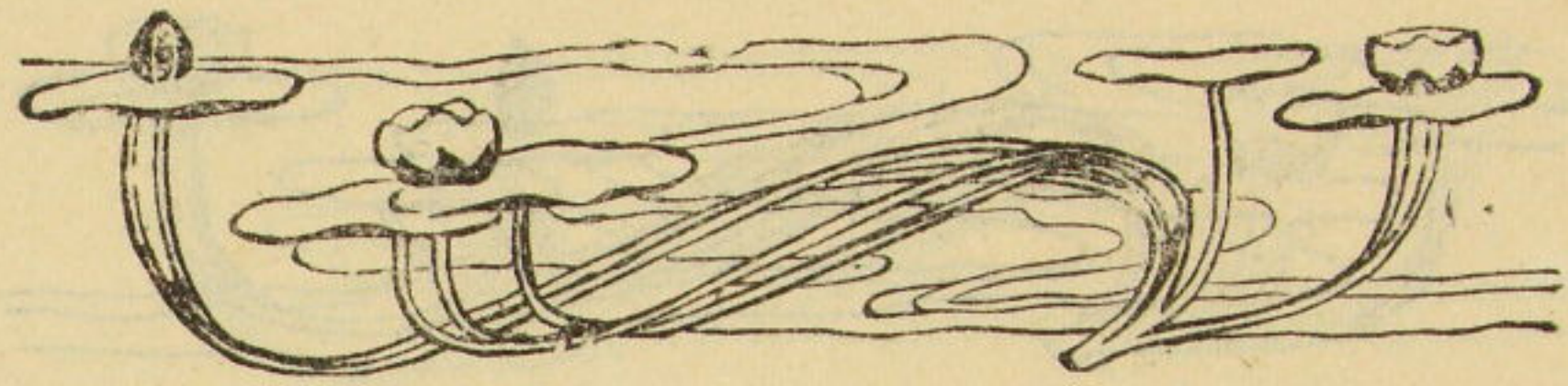
降りしく雨の絶えまより
 蟲の音 微かに 聞こえけり
 軒の滴り 點々と
 闇に騒ぎて 喧すし
 不穩の胸を おさへつゝ
 千々の思ひに 惑ふをり
 闇の中に 聲ありて
 急はしく 我を 呼ばれり
 不思議と からだもたぐれば
 滴る雫の 音のほか



室は闇なり 聲もなし
 またもや 雨は 降りだせり
 歇みつ 降りつ たえぐに
 細く 高く 音 疎ら
 蟲の音 いと 微かなり
 不穩の胸を おさへつゝ
 千々の思ひに 惑ふをり
 闇の中に 聲ありて



優しう 我を 呼ばれり
 やをら 床に 起きあがり
 呼びたるかたを みつむれば
 月影 いつか 窓を洩れ
 不審の闇の 照らされて
 我は 安けき 床の上
 蟲の音 さやけく 夜は静か



厲しく 我を 呼ばれり
 おびえつ わたり みまはせば
 雨 疎らなる 音のほか
 室は闇なり 聲もなし
 五
 雨は 全く 晴れにけり
 軒の滴り 葉の雫
 次第に 細り 音 絶えぬ
 この時 近く 聲ありて

明治卅九年二月十二日印刷
明治卅九年二月十五日發行

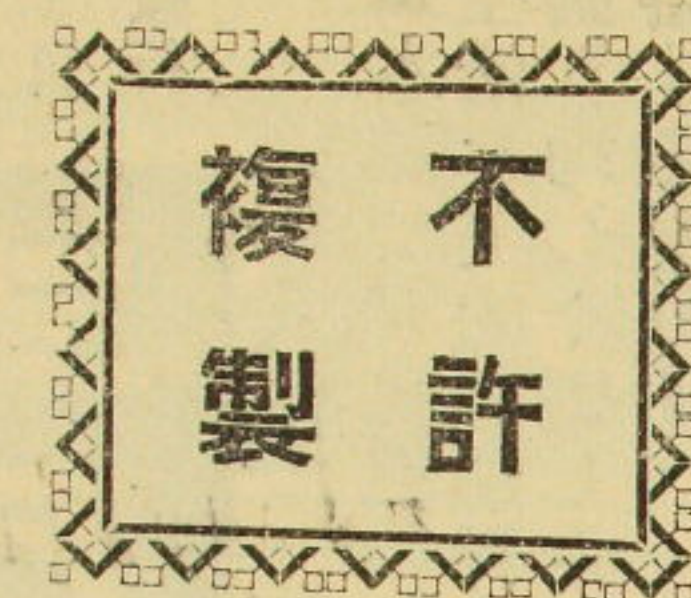
わか草
定價 金參拾錢

著者 樋口隆一

發行人 熊谷千代三郎
東京市本郷區真砂町十七番地

印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目廿番地

印刷所 株式會社 國光社
東京市京橋區築地二丁目廿一番地



發行所 大賣捌
東京市本郷區真砂町十七番地
平民書房
東京室、東海堂、警醒社、(大阪) 大華堂
上田屋、中庸室、長明堂

◀ 思想潮流文藝評論雜誌 ▶

火鞭
 每月一回
 十日發行
 一部十錢
 郵稅一錢

執筆者
 內田魯庵、網島梁川、山路愛山、堺利
 彦、宮田脩、關如來、谷江風、久津見
 藤村、桑田春風、坂井犀水、徳田秋江
 宮崎湖處子、幸徳秋水、村上白虹、木
 月、仙醉、長谷川天徳、原霞外、柏木
 成路、臺、青柳有美、島中翠湖、西川
 二郎、松岡半佛、光

發行所 東京市本郷區 眞砂町十七 平民書房

定價 半年五分 一年十錢
 郵稅 五分
 注文 小爲替又切手
 増割一

每月一回
 十日發行

(全紙優美紫刷)
 (每號西洋名畫入)

青春

第八號 二月十日發行 !!

▲本誌は、自然の美に遠かり往く人生を呼戻し、人生の生活を美的に解釋し、慰藉と活動とを求めんが爲め、共に動き均しく楽しみ、人生の最高理想たる、自然の平和に浴するを期す

- 憂鬱ある人
- 憤怒ある人
- 悲嘆ある人
- 煩悶ある人

は、來れ青春の誌上に、來て慰藉と活動とを求めよ。
 發行所 東京市本郷區 眞砂町十七 平民書房

定價 一部五錢 半年分廿八錢 一年分五十五錢
 郵稅 五分
 注文 小爲替又切手
 増割一

堺利彦著(再版) 價卅五錢 郵稅不要

半生の墓

(目次) 予の半生 ▲ 哀史梗概 ▲ 永久の満月 ▲ 不知所往列傳 ▲ 風流乞食 ▲ 其他數篇
● 本書は著者が亡き妻の一週年紀念として發行せしものにて卷中『予の半生』に於て自ら半生の經歷を語る宛然是れ哀史

斯波貞吉編述 價卅五錢 郵稅不要

知識と趣味

小品 千題
科學、哲學、宗教、政治、文學、地理、統計、現代最新の知識は收めて此中にある。滑稽、諧謔、頓才、諷刺、世界最大の趣味は集めて此中にある。

トルストイ著 定價廿錢 內田魯庵譯 郵稅不要

イワンの馬鹿

● 勝に傲る者よ、講和に憤る者よ、權力に渴する者よ、富貴に淫する者よ、生活に勞る者よ、眞理に悶ゆる者よ、此渺たる小冊子に一大教訓の潜藏するを發見せよ。

福田英子著(新刊)

妾の思出

▲ 定價四十錢 郵稅四錢 ▼
▲ 著者眞に『妾の半生涯』を公にして自ら其半生の經歷を語るや世は爲に殆んど震盪せりき ▲ 彼女今や渾身の熱血湧いて本書を出しぬ。

發行所 東京 市町 本十 郷七 平民書房